

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 8月

作成者：伊藤桜羽

作成日：9月1日

皆様、初めまして。この度、2025年福井県奨学生としてアメリカのオハイオ州にあるフィンドレー大学に留学させていただいております。伊藤桜羽と申します。福井県奨学生として、このような素晴らしい機会をいただき、心から感謝しております。また、私の留学を支えてくれている家族や友人たちに感謝し、与えられた約10ヵ月という期間を悔いの残らぬように、勉学に励み、豊かで有意義な留学となるよう、日々精一杯努力をしてまいりたいと思います。

【フィンドレー大学について】

フィンドレー大学には、教育、医療健康、薬学、ビジネス、人文社会学、自然科学の6つの学部があります。キャンパス内にはジムや図書館、カフェなどの施設が充実しており、長時間利用可能です。24時間勉強することが可能な場所もあり、多くの学生が利用しています。また、セキュリティの車が24時間学内を巡回しているため、安心してキャンパスライフを送ることができます。



【授業について】

私は英語集中コース（IELP）の授業を受けており、後期から学部の授業を取るために必要な英語力を身に付けるために、Reading, Writing, Listening, Speaking, Grammar, Communication を学んでいます。また、IELPの他に Experience in Japanese の授業を取っており、Japanese Film の授業を聴講しています。フィンドレー大学では少人数教育が主であり、わからないことがあれば授業中でもその場ですぐ質問できるのでとても良い環境だと感じています。また、どの授業においても自分はどう考えるのか、他人の意見を聞いてどう感じたのかを発言することが求められるので、学生の積極性が重要になってきます。私は元々自分の考えを述べるのが得意ではないので、英語でとなるとさらにハードルが上がるので不安もありますが、どの授業でも発言回数をできるだけ増やすように心がけています。他にも、Choir の授業も取っているのですが、大学外からも受講者がきているので幅広い層の人や分野の人と関わるととても良い機会だなと感じています。

【生活について】

私はキャンパス内にあるグループハウスに、6 人のアメリカ人の学生と住んでいます。アメリカに渡航する前から SNS で連絡を取り合っていたこともあり、出会ってすぐに仲良くなることができました。学校やフインドレー、アメリカの文化のことなどわからないことを聞くと、毎回とても丁寧にわかりやすい説明をしてくれたり、授業がない時間に自分の部屋にいと遊びに行こうと声をかけてくれたり、ショッピングやディナーにも率先して連れて行ってくれるのすごく助かっているし、ハウスメイトたちの優しさに日々感謝しています。



最後まで読んでいただきありがとうございました。ここでの生活はまだ始まったばかりですが、既にたくさんの友人やサポートの手厚い先生方に恵まれ、充実した日々を過ごすことができます。有意義な留学となるように今後も努力していきます。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

アメリカに留学してから約2か月が経ちました。初めは不安もありましたが、新しい発見やまあ美がたくさんあり、毎日が刺激的です。本報告書では、学習面および生活面での経験を中心に報告いたします。

【学習面】

9月から本格的に講義が始まり、毎日が新しい学びに満ちています。講義は少人数体制で行われるため、先生やクラスメイトとの距離が近く、質問しやすい環境が整っています。先生方は常に親身でフレンドリーに指導してくださり、単に言語の四技能(読む・書く・聞く・話す)を鍛えるだけでなく、アメリカの文化についても幅広く学ぶ機会を得ています。授業の中では、ハンドサインや日常的なスラングなど、教科書には載っていない生きた英語を知ることでもでき、大変貴重な機会となっています。

また、授業は受け身の姿勢ではなく、積極的な参加が求められるため、常に集中して取り組む必要があります。学生たちの発言も非常に活発で、議論を通じてお互いに刺激を受けながら学ぶことができます。講義では、まだ時折先生の話すスピードについていけない場面もありますが、その際には質問をすれば丁寧に説明していただけるため、不安を感じることなく授業に臨めています。

課題に関しては、量は適切であるものの内容はやや難しいものもあります。特に、英語の書籍の読解課題には苦勞しています。現在はサスペンス系の物語を教材として読み進めており、物語文特有の表現や文体に戸惑いながらも、少しずつ理解が進むことで達成感を得ています。講義では、読んだ内容を何も見ずにクラスメイトや先生に詳しく口頭で説明する課題も課されており、理解力と表現力の双方を鍛える良い機会になっています。

また、講義や課題においては、わからない単語があっても辞書を使うことが禁止されており、文脈や単語の形から意味を推測する力が求められています。この取り組みによって、自分の英語力で考え抜く姿勢が身に付き、語学力の向上を最も強く実感しています。

全体を通じて、英語の四技能が少しずつですが確実に伸びてきていると感じています。今後も講義への積極的な参加と課題への取り組みを通じて、さらに語学力と理解力を高めたいと考えています。

【生活面】

9月は様々なイベントや活動を通して人とのつながりが深まり、学びと発見に満ちた1か月となりました。生活にも少しずつ慣れ、日々の生活の中で自分の成長を実感しています。

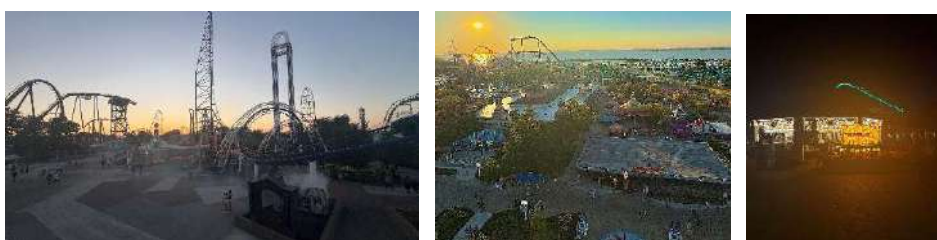
月初めには、「Kake Festival」に参加しました。これは、Kake Program という制度でアメリカを訪れている日本の大学生たちと共に現地の学生たちに日本文化を紹介するというイベントです。私はちぎり絵のブースを担当し、想像以上に多くの学生が訪れてくれました。椅子が足りなくなるほどの盛況ぶりに驚きつつも、日本文化に興味を持ってもらえることが嬉しかったです。個々の作品制作に加えて、「全員で一つの桜の木を作る」という私の提案が実現し、完成した瞬間は本当に感動的でした。この経験を通して、言葉の壁を超えて心が通じ合う喜びを感じました。



また、Choir（合唱団）の集まりにも参加し、先生の自宅で約 60 人の生徒と食事やゲームを楽しみました。アメリカの家庭的な温かさを感じ、仲間との絆もより深まりました。11 月には初めてのコンサート出演が控えており、英語・ラテン語・韓国語の曲を練習しています。難易度は高いですが、言語や文化を超えて音楽でつながることに大きなやりがいを感じています。



休日には、念願の Cedar Point に行きました。アメリカでも有数のとても大きな遊園地で、絶叫マシンが多いので絶叫好きの私にとって大満足の日でした。ハロウィン仕様の飾りつけもすでに施されており、カメラのシャッターをひっきりなしに押していました。観覧車やゴンドラから見た、遊園地全体が夕焼けに染まった景色は忘れられません。大自然とエンターテインメントが融合したアメリカらしい体験でした。また長期休暇の際に訪れたいです。



また、友人たちと映画「鬼滅の刃」を見るために初めてアメリカの映画館に行きました。形式的に日本と異なるところはほとんどなかったです。英語字幕を見ながら、「日本語ではこう言うけれど、英語だとこう表現するのか」と新たな発見が終始あり、語学学習にもつながりました。映画後、友人たちは皆感動して感想を述べあっていたり、中には涙を流している人もいました。私は改めて日本のアニメ文化を誇りに思いました。その他にも、ハウスメイトの演劇を観に行き、彼女の表現力に心を打たれました。友人の努力や才能を間近で感じ、自分も何かに真剣に取り組みたいと刺激を受けました。



さらに、日韓学生でご飯会を開き、日本料理と韓国料理を現地の学生たちと一緒に作りました。私は唐揚げ、手巻き寿司、味噌汁を担当しました。今まで開催したご飯会の中でベストな出来だと皆褒めてくれたので嬉しかったです。日本食の魅力を改めて感じると同時に、異文化交流がいかに豊かで温かいかを実感しました。それに加えて、Nara Ramen と Tensuke Ramen にも行き、日本の味を懐かしみました。海外で食べる日本食は特別に感じられ、心がほっとしました。



日常では、Pickleball を週に 4 回ほど楽しんでいます。運動を通して自然と会話が生まれ、友人の輪が広がりました。スポーツ観戦も積極的に行っており、サッカーやアメフト、バレーの試合を観ました。どの競技も迫力があり、特にアメフトの試合は熱気に満ちていて印象的でした。これまで観戦した試合は全て勝利しており、改めてフィンドレー大学がスポーツ強豪校であることを実感し、大学全体の一体感に感動しました。夜には友人たちと Switch でマリオパーティやマリオカート、カードゲームをするのが日課となっており、笑いの絶えない時間を過ごしています。



この1か月を振り返ると、文化や言語の違いを超えて多くの人と関わり、自分の世界が大きく広がったと感じます。今後も出会いと学びを大切に一日一日を充実させていきたいです。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

秋も深まり、キャンパスの木々が鮮やかに色づく季節となりました。アメリカに留学してから約3か月が経ち、ようやくこちらでの生活にも慣れてきました。このような貴重な機会を与えてくださった方々に、改めて心より感謝申し上げます。

【学習面】

・ 中間試験

10 月にはこちらで初めてとなる中間試験がありました。どの講義においても事前に十分な復習を行い、落ち着いて試験に臨むことができました。出題内容には、授業中に教授が雑談の中で触れた内容や、授業内のディスカッションで扱ったテーマなども含まれており、日頃から授業を丁寧に聞き取り理解する姿勢の重要性を改めて実感しました。特に印象的であったのは、リスニングおよび記述式の問題です。リスニングでは、音声を聞き取りながら要点を整理し、その内容を自分の言葉で Summary としてまとめるという形式の問題がありました。単に聞こえた言葉を写すのではなく、話の流れや意図を理解してまとめる力が求められ、とても良い学習体験となりました。また、グラフや表をもとに、そこから読み取れる情報を箇条書きで順に説明する問題もあり、英語で論理的に分析・表現する力が問われました。これらの試験を通して、単なる知識の暗記にとどまらず、「理解した内容を自らの言葉で正確に説明する力」が重視されていることを強く実感しました。今後も、日常的に授業内容を振り返り、より深い理解を積み重ねていきたいと考えています。

・ Genki Kids

「Genki Kids」プロジェクトの実践授業が開始されました。これはフィンドレー市内の子どもたち（今回は8~12歳が参加）に日本語および日本文化を紹介することを目的とした教育活動です。私はその中で「数字とカウント、誕生日」の単元を担当しました。福井出身の私はイントネーションに方言が出やすいため、子どもたちに正しい日本語を教えられるよう意識して標準語で話すよう努めました。授業ではローマ字表記を活用したのですが、「9=kyu (キュ)」「10=ju (ジュ)」「5=go (ゴー)」などを正確なローマ字読みではなく、英単語で使用される際の発音で行っている子が多かったため、その発音の違いを説明し、繰り返し正しい発音を指導することに力を入れました。特に“roku (6)”の“r”の発音や“hyaku (100)”の“ハヤ”の音は子どもたちにとって新鮮だったようで、楽しそうに繰り返して練習している様子が印象的でした。

さらに、毎回のレッスンでは「きらきら星」を日本語で歌う練習も取り入れています。子どもたちは言葉の吸収が早く、短期間で正確な発音を身に付けており、その成長の速さに驚

かされています。最終回の授業では「ファミリーナイト」で保護者の前でこれまでの練習の成果を披露することになっています。そのため、授業ではより完成度を高められるよう、学習支援に積極的に取り組んでいます。

また、私がペアを組んで担当している児童は8歳の女の子で、明るく好奇心旺盛な性格です。授業の合間には、互いの国の文化や日常生活について話し合うことも多く、言語教育を通して相互理解が深まっていると感じます。この活動を通じて、言葉を教える難しさと同時に、異文化を共有し合う楽しさを実感しています。



・ Choir Concert

Choir（合唱）の授業で初めてコンサートに参加しました。今回は、“Feel the Spritz” という教材に掲載されているスピリチュアルやゴスペルの楽曲を中心に練習し、発表しました。具体的には、以下の楽曲を合唱しました。

“Joshua Fit the Battle of Jericho”、“Steal Away”、“Got a Robe”、“Sometimes I Feel Like a Motherless Child”、“Ev’ry Time I Feel the Spirit”、“Deep River”、“When the Saints Go Marching In”

これらの楽曲は独特なリズムとハーモニーを特徴としており、音の重なりを揃えることに苦労しましたが、全員の声が美しく調和した瞬間には深い感動を覚えました。

また、他にも韓国語の“Mon-nee-Joh (Evocation)”、ラテン語の“Beati Quórum Vía”、スペイン語を含む“Chili Con Carne”など、複数の言語による作品にも取り組みました。中でも印象に残ったのは、韓国語の“Mon-nee-Joh”です。この楽曲は、失われた愛しい人への思いを静かに、かつ美しく表現した合唱曲で、“Mon-nee-Joh”という言葉には「あなた（愛しい人）よ」と呼びかけるような切なさが込められています。穏やかなバラード調でありながら、和音の重なりが非常に繊細で、各パートのハーモニーが響き合った瞬間がとても心地よく、音楽の持つ力を強く感じました。

来年2月末にはヨーロッパツアーへの参加が予定されており、今後はさらに新しい楽曲が追加される予定です。すべて暗譜する必要があるため、外国語の歌詞を覚えつつ正確な音程を維持することは容易ではありませんが、今回のコンサートを通して、改めて「合唱という芸術が持つ人の心を動かす力」を実感しました。今後も引き続き練習に励み、より良い演奏を目指して努力を重ねていきたいと思っています。



【生活面】

10 月は学習面に加えて、現地での文化的・交流的な活動を通じて、アメリカの生活様式や価値観により強く触れる機会の多い 1 か月でした。授業外での経験が非常に充実しており、アメリカ社会の多様な側面を実際に体験することができました。

・ハウスメイト

毎週火曜日の夜にはハウスメイト全員でアメリカの人気テレビショーである “Dancing Stars” を鑑賞しています。この番組は、著名人とプロのダンサーがペアを組み、毎週異なるテーマに沿ったダンスパフォーマンスを披露し、審査員や視聴者の投票によって順位が決まるという内容です。私たちは午後 8 時から約 2 時間にわたって番組を見ながら、パフォーマンスや衣装、審査員のコメントなどについて英語で意見を交わしています。この習慣は単なる娯楽ではなく、自然な英語表現を学ぶ貴重な機会となっています。特に、ハウスメイトとの会話を通して、文化的な感覚の違いやユーモアの表現を理解することができ、英語のリスニング力やスピーキング力の向上にもつながっていると感じています。毎週スマホのメッセージ機能を使って投票を行うのですが、私は一度、表現力に一目惚れしたダンサーの方に投票をしました。ハウスメイト各々に推しがあり、みんな必死にスマホで推しの名前を連打し、投票に少しでも貢献しよう頑張っている姿が可愛らしいです。毎回とても和やかな雰囲気です。有意義な時間を楽しんでいます。



・ハロウィン期間の街

また、10月といえばハロウィンの季節です。街中はオレンジや黒の装飾で彩られ、地域全体がこの行事を楽しむ雰囲気に包まれていました。フィンドレー大学はイメージカラーがオレンジなので年中オレンジで溢れていますが、ハロウィンの時期は普段より一層オレンジが強調されていました。私はハウスメイトと一緒に Pumpkin Carving を行い、ジャック・オー・ランタン作りを体験しました。かぼちゃの中身をくり抜いて顔の形をデザインする作業は予想以上に体力を奪われる上に難しかったです。作業後、完成したものを全員で並べてみると、それぞれのジャック・オー・ランタンの表情やデザインが個性的で、想像以上に雰囲気があり、とても素敵な光景になりました。また、友人の誘いで Pumpkin Field にも出かけました。広大な畑に無数のかぼちゃが並び、家族連れや子どもたちが楽しそうに写真を撮ったり、お気に入りのカボチャを選び嬉しそうに持ち帰る姿が印象的でした。まさにアメリカの秋を象徴する光景であり、地域社会の温かさを感じるひとときとなりました。地域の住宅街では家全体をハロウィン仕様に装飾した「ハロウィンハウス」も多く見られ、住民の創意工夫の豊かさに感心しました。日本ではあまり街の光景からハロウィンを感じることはないので、こうした地域ぐるみの取り組みから、アメリカにおけるハロウィンの文化的な重要性を肌で感じる事ができました。



・ハロウィンハウス

ハロウィン当日、大学の敷地内に住む老夫婦の方々にお家に招待していただき、「ハロウィンハウス」を訪問させていただきました。実際に伺ってみると、その装飾の完成度と世界観の作り込みに大変驚かされました。家の外観からすでに雰囲気を作り込まれており、玄関までの道には不気味な音楽が流れ、庭には墓石の形をしたオブジェや人骨を模した装飾が並んでいました。まるで映画の世界に迷い込んだかのような錯覚を覚えるほどでした。屋内の装飾も非常に凝っており、天井や壁には蜘蛛の巣を模した布や骸骨の人形が吊るされていました。部屋の照明も薄暗い場所があり、オレンジや紫のライトによって不思議な雰囲気が演出されていました。特に印象的だったのは、いたるところに置かれていた骸骨の人形で、その精巧さや配置の工夫から、老夫婦のこだわりが強く感じられました。

さらに、食事の内容もハロウィンのテーマに沿っており、ユーモアと創造性にあふれていました。例えば「ALIEN EGGS (エイリアンの卵)」というお菓子は、カステラのような形をしたもので、「これを食べたらエイリアンになれるかもしれない」というユーモラスな設定が添えられていました。また、「DRIED DEMON EYES (乾燥した悪魔の目)」と呼ばれるものは、真っ赤なうえに強烈な辛さだったので、見た目も味も強烈な印象を残しました。さらに「FRIED DRAGON SCALES (揚げたドラゴンの鱗)」というお菓子もあり、これは薄くスライスしたポテトを揚げたもので、香ばしくサクサクした食感が特徴でした。そのほかにも、ピザやおばけの形をしたミニケーキなどが並び、見た目も味も楽しめるメニューばかりでした。

しかし、何よりも驚かされたのは老夫婦自身の仮装でした。旦那さんは全身を真っ赤に塗り、牙のような八重歯をつけた吸血鬼風の衣装を身にまとい、その完成度の高さは圧巻でした。さらに感心したのは、外見だけでなく、話し方や立ち振る舞いまでも役になりきっていた点です。まるで映画の登場人物のように振る舞い、設定や世界観を崩さない徹底した演出がなされていました。そのため、訪問中は終始飽きることがなく、まるでテーマパークにいるような感覚を味わうことができました。ご夫婦は何か季節のイベントがある度に家をデコレーションされていることで有名なので、まだ11月ですがもう既にクリスマスも楽しみにしています。



・観光など

週末には Hocking Hills へ小旅行をしました。Hocking Hills はオハイオ州内でも有名な自然公園で、紅葉が最も美しい時期に訪れることができました。澄んだ空気と静かな森の中で滝や岩の造形を眺めながらのハイキングは、心身をリフレッシュさせてくれる時間でした。特に、朝日が差し込む溪谷の風景は息をのむほど美しく、自然の雄大さを改めて実感しました。日本の秋とは異なる、アメリカならではのスケールの大きさを感じました。他にも、Columbus, Cincinnati, Dublin, Bluffton, Perrysburg などを訪れましたが、どの場所もまだ十分に周りきれていないので、Thanksgiving などの休暇を活用して、さらに多くの地域を訪れ、現地の文化や人々の暮らしに触れてみたいと考えています。



このように、10月には授業内外問わず、さまざまな活動を通して、アメリカの文化や地域社会、人々の価値観に深く触れることができた月でした。日常の中で積極的に交流の機会を持つことが、語学力の向上だけでなく、異文化理解の促進にもつながることを強く実感しています。今後もこの経験を大切にしながら、アメリカでの生活を通して多様な価値観を学び、自分自身の視野をより一層広げていきたいと思っています。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

11 月に入り、私が滞在しているオハイオ州フィンドレーでは本格的な冬の訪れを感じるようになりました。気温は一桁から氷点下の日が多く、朝晩は特に冷え込みが厳しくなっています。街はすでに雪が降り始め、木々や屋根が白く覆われ、冬景色が広がっています。日常生活の中でも、厚手のコートや手袋が欠かせなくなり、外を歩くと吐く息が白くなるほどです。こうした環境の変化を通じて、季節の移ろいを肌で感じるとともに、現地の人々が冬を楽しむ工夫や文化にも触れる機会が増えてきました。寒さは厳しいものの、街の雰囲気はどこか暖かく、感謝祭やクリスマスに向けた準備が始まり、華やかな装飾が街を彩っています。このような冬の環境の中で、今月も学業や生活において様々な経験を積むことができましたので、以下に報告致します。

【学習面】

今月も地域の子供たちを対象とした日本文化紹介活動に参加し、異文化交流の意義を改めて感じる事ができました。特に、Gifted Program と Genki Kids Program の二つの活動は、対象や形式は異なるものの、どちらも「日本文化を体験的に学んでもらう」ことを目的としており、自分自身にとっても大きな学びとなりました。

・ Gifted Program

このプログラムは、ハンコック群教育サービスセンターが才能教育の一環として実施している取り組みで、学力や創造性、芸術的才能などで優れた児童が対象となっています。こうした子供たちは特別な学びの機会として大学を訪れ、通常の授業では得られない体験を通じて視野を広げています。その一環として、私はフィンドレー大学を訪れた小学 5 年生に日本の礼儀について紹介しました。まず、「先生にリスペクトを示すにはどうすればよいか」という問いかけから始め、日本では授業の開始・終了時に必ず挨拶を行い、先生や仲間に敬意を示す文化があることを説明しました。アメリカでは授業の冒頭に先生と生徒がグータッチを交わすなど、よりカジュアルでフレンドリーな雰囲気があるということを子どもたちから聞き、両国の違いを分かりやすく伝えました。さらに日本のお辞儀には「会釈」「敬礼」「最敬礼」の三種類があり、それぞれ日常的な挨拶、改まった場面での挨拶、謝罪や特別な感謝を示す場面で使い分けられることを説明しました。子どもたちには実際に体験してもらい、礼儀の意味を身体で理解してもらうことができました。その後、日本の代表的なスポーツである相撲の歴史について話し、試合の動画を見せるなどして紹介しました。それに続き「とんとん相撲」のゲームを行いました。試合前には必ず「よろしくお願いします」と言い、お辞儀をするように指導し、遊びを通じて礼儀の大切さを学んでもらいました。力士は

事前に折り紙で手作りしたのですが、ぜひ持ち帰りたいと言う子が多く人気でした。子どもたちがとても好奇心旺盛で質問が止まなかったため、プログラム終了後に、予定にはなかった折り紙教室を開催しました。折り紙を通じてさらに日本文化に触れてもらうことができましたと思います。「日本に行ってみたい」「アニメ以外にも日本文化を深く知りたい」「今回のプログラムでこのブースがいちばん楽しかった」という声を多く聞くことができ、自分自身も大きなやりがいを感じました。



・ Genki Kids Program

この授業の最終回では、週に一度日本文化を紹介してきた子どもたちとそご家族が参加し、これまで学んできたことを簡単に発表しました。その後、折り紙、ちぎり絵、習字、かるたなどを体験していただき、日本文化の多様な側面に触れてもらいました。折り紙の題材として 千羽鶴の話を取り上げました。千羽鶴は「平和」や「願いの成就」を象徴する折り紙作品であり、病気の回復や幸せを祈る習慣があることを説明すると、ご家族も強い関心を示し、子どもたちと一緒に折り紙を楽しみながら「日本では折り紙にこんな深い意味があるのか」と驚いていました。折り紙が単なる遊びではなく文化的な意味を持つことを理解していただけたことは、大きな成果だったと思います。また、ちぎり絵では日本の象徴である富士山についても紹介しました。富士山は日本で最も高い山であり、古くから信仰や芸術の対象となってきたこと、そして日本人にとって特別な存在であることを伝えと、ご家族からは「写真で見たことはあるけれど、文化的な背景は知らなかった」という声上がり、話題が広がりました。子どもたちも「いつか本物を見てみたい」と口にし、ご家族と一緒に盛り上がる場面がありました。私のペアの女の子は、当初はあまり乗り気ではなく参加していましたが、次第に日本文化に興味を持ち、最後には私に日本語も交えた手紙を書いてくれました。その手紙には、「あなたとペアになって一緒に学んでいくうちにこの時間がすごく好きになった。もっと学びたいから次のイベントにも参加したい」と記されており、非常に感動しました。自分の活動が子どもたちやそご家族の心に届き、学びの楽しさを共有できたことは、印象深い経験になりました。



・マーケティング課題

English for Specific Purposes for learners of Cognitive Academic Language Proficiency の授業において、「日本の製品をアメリカ市場に売り出すなら何を選ぶか」というマーケティング課題に取り組みました。私は自分の出身地である福井県の伝統工芸品である越前和紙を選び、その独自性と文化的価値をどのようにアメリカで伝えられるかを考えました。和紙は日本文化を象徴する素材であり、単なる和紙としての用途にとどまらず、芸術的・実用的な幅広い可能性を持っていることも私がこの製品を選んだ一つの理由です。課題の中では、和紙は食品保存用のフードボックスに応用するなど、環境にやさしく持続可能性の高い製品として提案しました。アメリカ市場では「エコ」や「サステナビリティ」が重要な価値観となっているため、和紙の自然素材としての強みを活かし、環境意識の高い消費者層をターゲットとする戦略を考えました。さらに、和紙の美しさや手触りの良さを強調し、包装材やインテリア製品として展開する可能性についても検討しました。他の学生もそれぞれ独自の視点から製品を選び、興味深かったです。例えば、日本の銭湯を思わせる香りを取り入れたアロマキャンドルを企画し、癒しやリラクゼーションを重視するアイデアや、日本固有の柄をあしらった傘を提案する学生もあり、伝統的な美意識を日常生活に取り入れる工夫が示されていました。この課題を通じて、単に日本文化を紹介するだけでなく、それをどのように異文化の市場に適応させ、魅力的に伝えるかという視点を学ぶことができました。マーケティングの観点から文化を分析することで、自分自身の表現力や論理的思考力が向上したと感じています。また、和紙という身近な文化資源を題材にしたことで、自分のルーツを再認識し、それを国際的な文脈で活かす意義を強く実感する機会となりました。

【生活面】

・水泳、陸上、バレー、アメフト観戦

今月はキャンパス内外で行われた様々なスポーツイベントを通して、アメリカの大学スポーツ文化の迫力と熱量を改めて感じる機会が多くありました。

まず水泳の大会では、コロンビア出身の友人が 500 メートル自由形で圧倒的な差をつけて優勝し、そのスピードに心から驚かされました。普段は穏やかな印象の彼が、レースになると一気に別人のような力強さを見せ、会場中が沸きました。また、ブラジル出身の友人も見事な泳ぎで 2 位に入り、同じ大学の選手たちが上位を独占する結果となり、チーム全体のレベルの高さを実感しました。

さらに陸上の記録会では、陸上部のメンバーたちが自己ベストの更新を目指して全力で挑む姿を見て、スポーツに対する真摯な姿勢に胸を撃たれました。女子バレーボールの試合では、最後まで点を競り合う白熱した展開で惜しくも敗れたものの、選手たちのチームワークと粘り強さが印象に残りました。

そして大きなイベントとしては、大学のアメリカンフットボールの試合を観戦しました。NCAA NATIONAL PLAYOFFS ROUND ONE、ミネソタ大学との全国大会一回戦という特

別な試合で、スタジアムの熱気と迫力はいつも以上でした。

その日は試合前からスタジアムのそばの広い芝生のスペースには、マーチングバンド部の家族やアメフト選手の親御さんたちが集まり、テーブルいっぱいを持ち寄ったパンケーキ、サンドイッチ、ハンバーガー、フルーツなどをまるでお祭りの屋台のように自由に配っていたのがとても印象的でした。これがいわゆる「テールゲート文化」なのだと知り、まさに“The America”を体験した気分でした。特に私の友達のお父さんは、サンタクロースの格好で食べ物を配っていて、子どもから大人まで次々と話しかけられ、大人気でした。その明るく温かい雰囲気に触れ、スポーツを中心にコミュニティ全体が一体となるアメリカらしさを強く感じました。

試合自体は惜しくも敗れてしまいましたが、学生アスリートとは思えないほど高度なプレーが次々と展開され、まさに「本場のアメフト」を全身で味わうことができました。

こうしたスポーツ観戦を通して、学生生活の中に根付くスポーツ文化の豊かさを知り、外で体を動かす機会が減っていく冬の訪れを少し寂しく感じています。



・美術館、植物園、劇場、での文化体験

スポーツだけでなく、文化施設を巡ることでアメリカの芸術にも触れる機会が多くありました。

Columbus Museum of Art（コロンバス美術館）は、アメリカ印象派やモダンアートの作品で知られ、ジョージア・オキーフやエドワード・ホッパーなどの代表作を所蔵しています。私が訪れた際にはチョークアート展示もあり、子どもから大人まで楽しめる雰囲気でした。私は高校時代、世界史専攻だったこともあり、教科書や資料集で見たことのある作品を沢山肉眼で見ることができてとても感動しました。展示の幅が広く、作品の解説も丁寧で、気づくと3時間も滞在していたほど魅力的な美術館でした。



Phipps Conservatory（フィップス温室・植物園）は1893年に実業家ヘンリー・Wによって

て創設された、全米でも屈指の歴史を持つ温室施設で、私がネットで観光地をリサーチしていた際にぜひ行きたいと思っていた植物園の一つです。「自然を通して地域に人々を豊かにする」という理念のもとに開かれ、120 年以上にわたりピッツバーグの象徴的な文化施設として親しまれてきました。館内にはヴィクトリア様式の大温室を中心に、季節ごとの植物展示やアート作品が融合する空間が広がっており、その美しさと環境への取り組みが高く評価されています。特に、持続可能な建築と運営方針が世界的にも注目されており、LEED 認証をはじめ、環境デザインに関する様々な賞を受賞してきました。植物園としてだけでなく、「世界で最も環境にやさしい施設のひとつ」とも言われるほどです。

私は 11 月末に訪れたため、ちょうどクリスマス展示が始まっており、館内は一足早くホリデーシーズンの雰囲気になっていました。エリアごとにテーマの異なるクリスマスツリーやオーナメントが置かれ、華やかな装飾と植物が見事に融合していて、歩くだけで胸が高鳴るような空間でした。ガラス細工と植物の融合、ポインセチアが鮮やかに敷き詰められた部屋など、どこを見ても趣向が凝らされていて、まるでクリスマスの世界を旅しているような気分を味わうことができました。

特に印象的だったブースのひとつとして、日本庭園の展示もありました。小さな池が設けられ、その中には鮮やかな色をした鯉が泳いでおり、訪れた人々が静かに眺めて楽しんでいました。池の周りには苔や小石、ミニチュアの灯籠や橋が配置され、静謐な和の雰囲気が漂っていました。クリスマスの装飾が華やかな中で、このブースは落ち着いた趣があり、光やオーナメントの反射で鯉や庭園の小道がキラキラと輝くのがとても幻想的でした。また、この時期は多くの来場者で賑わうようで、友達のお母さんが事前にチケットを予約してくださったおかげで、ほとんど並ばずに入館することができました。もし予約が無ければ、外の歩道まで行列が伸び、21 時過ぎまで待つほどの大混雑でした。このことから、Phipps のクリスマス展示が地元の人々にとっても非常に人気が高く、毎年多くの人を惹きつける特別なイベントであることがよくわかりました。



さらに Benedum Center ではミュージカル『Les Misérables』を鑑賞しました。ブロードウェイ経験者を含むキャストによる力強い歌声、最先端の舞台技術を駆使した照明やプロジェクションマッピングによる演出が圧巻で、まさに作品の世界に引き込まれました。イギリス英語でスピードも速く聞き取りは難しかったものの、様々な角度から楽しめる非常に

完成度の高い舞台でした。劇場内の豪華さも印象的で、まるでオペラ座に迷い込んだかのような気分になりました。



・ Thanksgiving

11月の大きな文化行事である Thanksgiving（感謝祭）は毎年11月の第4木曜日に祝われ、家族や親しい人と一緒に過ごす日としてアメリカ人文化に深く根付いています。

私は友人の実家がある Pittsburgh（ピッツバーグ）に招待していただき、数日間ホームステイを経験しました。彼女は日本文化に興味があり、アニメや行事について話が弾み、私ももっと詳しく学びたいと感じる楽しい時間でした。Thanksgiving 当日は、友人の祖母宅に親族が勢揃いし、ターキー、パンプキンパイ、クランベリーなど Thanksgiving に欠かせない料理はもちろん、伝統料理や家庭独自のアレンジ料理が並び、さらにお母さまのお誕生日もお祝いするなど、温かい雰囲気の中で心温まるひとときを過ごしました。

Thanksgiving 最終日（11月30日）には、友人が幼い頃から通っている地元の教会に足を運びました。驚いたのは、教会内の椅子や装飾品がすべて紫色で統一されていたことです。紫はキリスト教において王族や権威、悔い改めや祈りの期間を象徴する色とされ、特にクリスマスに向けた準備期間である Advent（待降節）では祭壇や聖具に用いられます。11月最終日曜日はクリスマスに向けて心を整える特別な日とされ、信者たちが祈りを捧げます。私も教会の利用者の方々と共に静かに祈りを捧げ、宗教的な落ち着きと共同体の温かさを感じる貴重な体験となりました。



11 月は、スポーツ観戦や文化施設の見学、ホームステイを通して、アメリカの大学生活や地域文化、伝統行事に触れることができ、非常に充実した一か月となりました。特に、学生アスリートの活躍や、クリスマス展示やミュージカルの迫力、Thanksgiving の家族の温かさを体験することで、学びだけでは得られない貴重な経験を積むことができました。

冬の季節に入り、屋外での活動は減ってしまいますが、室内での文化体験や学びの機会も多くあるので、引き続き積極的に参加し、日々の学びを深めていきたいと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

12 月に入り、こちらフィンドレーでは雪が積もる日が増え、冬の景色がすっかり日常になってきました。12 月 12 日からは冬休みに入り、日本より少し早く学期が終わりました。葉を落とした木々の間を歩きながら今学期を振り返る中、今学期で帰国してしまう友人もあり、「このメンバーで過ごすのはこれで最後かもしれない」という寂しさも感じました。日本は年末・年始に向けてお忙しい時期かと思いますが、皆さまお変わりなくお過ごしでしょうか。こちらでの 12 月の学びや生活について、少しでも様子が伝わればと思い、以下にご報告いたします。

【学習面】

English for Specific Purposes 最終プレゼンテーション

12 月には、English for Specific Purposes の授業において、学期末の最終プレゼンテーションを実施いたしました。私は「Finding My Ikigai – A Journey Across Cultures, Music, and Identity」というテーマで、自分の生きがいをもどのように見つめてきたのかを、これまでの経験と留学生活を通して整理しながら発表いたしました。プレゼンテーションの前半では、日本文化に根づく「Ikigai (生きがい)」という概念を紹介し、その背景にある価値観や、日本人が日常の中で大切にしている感覚について説明しました。特に、Ikigai が「好きなこと」「得意なこと」「社会に役立つこと」「必要とされること」の重なりとして語られることに触れ、これを自分自身の経験にどのように当てはめられるかを考察する形で話を進めました。

また、自分のこれまでの生活を振り返り、特に「音楽との関わり」について述べました。私は専門的な音楽活動を行ってきたわけではありませんが、歌うことや踊ることが好きで、気づけばいつも音楽が身近にある生活を送ってきました。落ち込んだときに気持ちを支えてくれたり、前向きな気持ちに切り替えるきっかけになったりと、音楽は私にとって自然と寄り添ってくれる存在でした。こうした日常的な関わりを通して、「自分が心から落ち着けるもの」や「気持ちが軽くなる瞬間」がどこにあるのかを考え、それが私の Ikigai の一部になっていることに気づいた過程を紹介しました。プレゼンの中盤では、留学生活での経験について触れました。アメリカで生活する中で、日本の文化や価値観について説明する機会が増え、自分が当たり前だと思っていたことを言葉にして伝える難しさを実感しました。例えば、日本の礼儀作法や家族観、学校生活の特徴などを質問されるたびに、自分の文化を客観的に捉え直す必要性を感じました。こうした経験を通して、「自分は何を大切にしているのか」「どのような場面で自分らしさを発揮できるのか」を改めて考えるようになり、Ikigai というテーマがより身近なものとして感じられるようになりました。

準備段階では、授業で学んだ「分かりやすい構成づくり」や「相手に伝わる説明の工夫」

を意識しながらスライドを作成しました。特に、文化的な概念を説明する際には、専門的な言葉を使いすぎず、例を挙げながら丁寧に説明することを心がけました。また、スライドのデザインもシンプルにまとめ、内容が伝わりやすいように調整しました。発表当日は緊張しましたが、クラスの皆さんが興味を持って聞いてくださっている様子が伝わり、落ち着いて話すことができました。発表後には先生から「今まででいちばん良いプレゼンテーションだった」と評価していただき、自分の努力が形になったことを実感いたしました。この言葉は大きな励みとなり、今後の学びに向けての自信にもつながりました。今回のプレゼンテーションを通して、英語で自分の考えを整理し、相手に伝える力が向上しただけでなく、自分自身の価値観や生き方について深く考える機会にもなりました。今後の学習や将来の進路を考えるうえでも、非常に意義のある経験となりました。

【生活面】

12月12日から冬休みに入り、日本の大学よりも一足早く学期が終わりました。キャンパスの木々はすでに葉を落とし、雪が積もった歩道を歩きながら、「本当に今学期が終わるのだな」と静かに実感する日々でした。同時に、今学期で帰国してしまう友人もあり、「このメンバーで過ごせるのは最後なのかもしれない」という寂しさも少しずつ現実味を帯びてきました。

Toledo Museum of Art

今学期で帰国してしまう友人がいたこともあり、「最後にみんなで思い出を作りたい」と私から提案し、授業のクラスメイトと教授と一緒に Toledo Museum of Art (トレド美術館) を訪れました。フィンドレーから車で1時間ほどの場所にある美術館で、到着するとまずその建物の美しさに驚かされました。白い大理石のような外壁と大きな柱が並ぶクラシックな外観で、まるでヨーロッパの宮殿のような雰囲気があり、入口へ向かうだけで少し背筋が伸びるような気持ちになりました。

Toledo Museum of Art は、1901年に地元のガラス産業で成功した実業家 エドワード・ドラメルによって創設された、120年以上の歴史を持つ美術館です。アメリカの地方都市にある美術館としては珍しく、創設当初から「地域の人々に芸術を開く」という理念を大切にしてきた場所です。トレド美術館は長い年月をかけてコレクションを増やし、現在では3万点以上の作品を所蔵していると言われています。古代エジプトの彫刻、ギリシャ・ローマの壺、アジアの陶磁器、ヨーロッパの宗教画、アメリカの現代アートまで、幅広い時代と地域の作品が集まっており、地方都市の美術館とは思えないほどの充実ぶりです。日本文化に関するブースもあり、能と狂言、茶道などが紹介されていました。

ここで特に有名なのが、ガラス工芸のコレクションです。トレドは「アメリカのガラスの都」と呼ばれるほどガラス産業が盛んな地域で、その歴史を背景に、世界的にも評価の高い

ガラス作品が集められています。敷地内にある Glass Pavilion（ガラスパビリオン）は、建築そのものがアート作品のような美しさで、透明なガラスの壁が光を取り込み、展示されているガラス作品が時間帯によって違う表情を見せるのが印象的でした。

また、トレド美術館は「本物の名画が見られる美術館」としても知られており、ゴッホ、モネ、ピカソ、ルノワール、レンブラントなど、世界的巨匠の作品が常設展示されています。地方の美術館でこれほどの名画を間近で見られる場所は珍しく、アメリカ国内でも「質の高い美術館」としてたびたび紹介されるほどです。展示室に入った瞬間、教科書でしか見たことのなかった名画が目の前に現れたときの衝撃は忘れられません。ゴッホの筆の跡、モネの光の揺らぎ、ピカソの大胆な構図など、どれも写真では絶対に伝わらない迫力があり、作品の前に立つだけで胸が震えるような体験でした。



バースデーパーティー

12月は偶然にも誕生日の友人が多く、クリスマス間近だったこともあり、ほとんど毎週のようにパーティーが開かれました。部屋に飾り付けをしたり、手作りケーキを用意したり、夜遅くまでボードゲームやおしゃべりを楽しんだり、寒さの厳しい季節でありながら、人とのつながりを強く感じる時間がたくさんありました。

特に、日頃から大変お世話になっている先輩の誕生日には、「今までの感謝を何か形にしたい」と思い、サプライズを計画しました。その先輩と関わりのある友人たちに協力をお願いし、一人ひとりからビデオメッセージを集めました。日本語で話してくれる人、拙い日本語に挑戦してくれる人、英語で思い出を振り返ってくれる人、母国語で祝う他国からの留学生たちなど、メッセージの形はさまざまでしたが、それぞれに感謝や温かさが詰まっていました。集めた動画を編集し、歌の歌詞と重ねて一本の歌詞動画にまとめ、パーティーの終盤でこっそり流しました。画面に知っている顔が次々と映し出されるたびに、先輩が驚いた表情を見せ、最後には目を潤ませながら「本当にありがとう」と何度も言うてくれました。その姿を見て、私自身も胸がいっぱいになり、「人のために時間と気持ちを使うことの嬉しさ」を改めて感じました。



Wildlights at Columbus Zoo

12月の思い出の中でも特に印象に残っているのが、Columbus Zoo and Aquarium（コロンバス動物園）のイルミネーションを見に行った日のことです。Columbus Zooは、1927年に開園したアメリカでも歴史ある動物園のひとつで、長い年月をかけて地域の人々に愛され続けてきました。開園当初は小さな動物園だったそうですが、地元の支援や寄付、そして動物保護活動の広がりとともに規模を拡大し、現在では約580エーカー（東京ドーム約50個分）という広大な敷地を持つ、全米でもトップクラスの動物園へと成長しています。園内には600種以上・1万匹以上の動物が暮らしており、北米の動物園の中でも特に展示の質が高いことで知られています。動物たちの生息環境をできるだけ自然に近づける工夫がされていて、ただ動物を見るだけでなく、その動物がどんな環境で生きているのかを体感できるように設計されています。エリアは「アフリカ」「アジア」「北極圏」「北米」「オーストラリア」など地域ごとに分かれており、歩いているだけで世界を旅しているような気分になれるのも魅力のひとつです。

特に冬の時期に開催される“Wildlights（ワイルドライツ）”は、1988年に始まった伝統的なイルミネーションイベントで、今ではオハイオ州の冬の風物詩として定着しています。毎年100万個以上のライトが園内全体に飾られ、動物園というよりも、まるで光のテーマパークのような雰囲気になります。動物をかたどったライトアップや、音楽に合わせて色が変わるショー、光のトンネルなど、アメリカらしいスケールの大きさに圧倒されました。私が訪れた日も、入口のゲートをくぐった瞬間から、目の前に広がる光の海に思わず息をのみました。木々には無数のライトが巻きつけられ、遠くの方まで続く光の道がキラキラと輝いていました。寒さは厳しく、手袋をしていても指先が冷たくなるほどでしたが、光に包まれた園内を歩いていると、冬の冷たささえもどこか心地よく感じられました。園内を進むと、動物の形をしたライトアップが次々と現れ、まるで光の動物たちが夜の園内を歩き回っているようでした。特に印象に残っているのは、巨大なキリンのライトと、湖の上に浮かぶように設置された青い光のイルカたちです。動物園ならではのイルミネーションで、ただのライトアップではなく、「動物園だからこそできる表現」が随所にありました。途中で友人たちとホットチョコレートを買って、湯気の立つカップを手にしながら光のトンネルをくぐりました。日本のイルミネーションは街中やテーマパークで見ることが多いですが、動物園全体が光に包まれるという体験は新鮮で、「アメリカの冬の楽しみ方ってこういう感じなんだ」

と実感しました。



Christmas break

12月20日から28日までは、キャンパス内で同じハウスに住んでいる友人Evaのご実家に滞在させていただきました。普段から何かと気にかけてくれる存在で、「冬休みの一部をうちで過ごさない？」と声をかけてもらったことがきっかけでした。アメリカで過ごす初めてのクリスマスを、友人の家族と共に迎えることができるというのは、留学生としてとても貴重な機会だと感じました。Evaの家は、郊外の静かな住宅街にあり、夜になると近所の家々のクリスマスライトが一斉に輝いていました。家の中には大きなクリスマスツリーが飾られており、オーナメントの一つひとつに家族の思い出が込められていると聞いて、とても温かい気持ちになりました。Evaには弟が三人おり、毎日のようにちょっとした兄弟げんかが起こるにぎやかな家庭でしたが、その姿もどこか微笑ましく感じました。食卓を囲むときには、学校のことやスポーツの話、ちょっとした冗談などが飛び交い、日本の家族団らんとはまた違った「アメリカの家庭の空気」を間近で感じることができました。

クリスマスイブには、母方の親戚が約30人集まりました。近所の教会を貸し切ってパーティーを行い、大きなテーブルがいくつも並べられ、手作りの料理やデザートがぎっしりと並んでいました。いそこたちは私と同年代の人が多く、「日本ではクリスマスはどうやって過ごすの？」「お正月ってどんな感じ？」とたくさん質問してくれました。私のつたない英語にも根気強く耳を傾けてくれ、「日本にも行ってみたい」と言ってくれたのが嬉しかったです。最初は、親戚の集まりというごく個人的な空間に自分が入っていても良いのだろうかという不安がありましたが、Evaがそばでさりげなくフォローしてくれたり、親戚の方々が「あなたも家族だからね」と言ってくれたりしたことで、少しずつ心がほぐれていきました。

クリスマス当日は、今度は父方の親戚が約20人集まりました。日本では、親戚がここまで大人数で集まるのは主にお正月のイメージが強いですが、アメリカではクリスマスがその

役割を担っているのだと、実際に体験してよく分かりました。「日本とアメリカでは、クリスマスとお正月の位置づけがちょうど反対なのかもしれない」と感じると同時に、どちらの国でも「年に一度、家族が集まる日」がとても大切にされていることに共通点を見出しました。

親戚の集まりでは、ゲームをしたり、クイズをしたり、カードゲームで盛り上がりたりと、言葉を使う場面も多くありました。最初は、英語の語彙の少なさや発音への不安から、「聞いているだけの方がいいかもしれない」と一歩引いてしまいそうになる自分もいました。しかし、家族の皆さんは、私が言葉に詰まっても最後まで待ってくれたり、言い直したいときに優しく助け船を出してくれたりしました。「間違えても大丈夫だよ」「あなたの話をもっと聞きたい」といった雰囲気が自然とそこにあり、そのおかげで次第に「間違えたら恥ずかしい」という気持ちより、「一緒に楽しみたい」という思いが強くなっていきました。気がつくと、私はゲームのルールを説明していたり、自分から冗談を言って笑い合っていたりして、最初に感じていた不安はすっかり薄れていました。



Christmas Presents

最も驚いたのは、クリスマス当日のプレゼントの光景です。朝早く、弟たちに「起きて！プレゼントを開封するよ！」とたたき起こされ、まだ眠い目をこすりながらリビングへ向かうと、大きなクリスマスツリーの下に山のようなプレゼントが積まれていました。映画でしか見たことがないような光景に、一瞬、目の前の景色を信じられませんでした。一人につき30個以上のプレゼントが用意されており、まさかのことに、私の名前が書かれた包みも30個ほど並んでいました。家族全員がツリーの周りに座り、両親が「これはあなたに」「これは次ね」と順番に手渡していきます。包みを開けるたびに歓声が上がり、小さな子どもに戻ったかのように目を輝かせる家族の姿がとても印象的でした。私も一つひとつのプレゼントを開けながら、「ここまでしてもらっても良いのだろうか」という戸惑いと、「本当に歓迎してくれているのだ」という嬉しさが入り混じった、何とも言えない気持ちになりました。特に心に残ったのは、Evaのご両親が、私との日々の何気ない会話をよく覚えていてくださったことです。「アメリカのこういうお菓子が気になっている」「こういう文房具が好き」「寒

い日のために、もう少しあたたかいものを用意しなければ」そうした小さな一言を拾ってくださり、それぞれに合ったプレゼントを選んでくださっていました。その心遣いに触れ、「私はただの留学生ではなく、本当に家族の一員として接してもらっているのだ」と強く感じました。また、親戚の方々もあらかじめ Eva から情報収集をし、私宛のプレゼントを用意してくださっていて、すごく有難く思いました。出会ったばかりではありましたが、こんなに素敵な人たちとクリスマスと共に過ごせたことをとても幸せに思います。



ホームステイ最終日には私にお別れを言うために近くに住むいとこや祖父母が駆けつけてくださいました。素敵な経験と思い出のお返しがしたいと思い、前日に Eva に手伝ってもらい、家族各々へのプレゼントを用意しました。気持ちを込めて書いた手紙もプレゼントもそれぞれに涙を流して喜んでもらえて嬉しかったです。また、どの方も「また週末でもいつでも来てね。連絡を取りたいから連絡先を交換しよう」と別れを惜しんでくださり、私もまたすぐに会いたいと思いました。

この8日間は、アメリカのクリスマス文化や家族の過ごし方を深く知るだけでなく、人の温かさに何度も触れる時間でした。留学生として「特別扱い」されるのではなく、一人の親戚のように自然に受け入れてもらえたことは、私の中で大きな自信と安心感につながりました。フィンドレーでの留學生活の中でも、このクリスマスの経験は、間違いなく忘れられない大切な思い出となりました。

以上のように、12月には冬休みの始まりとともに、学びの面でも生活の面でも、これまでの経験が一つひとつ積み重なっていくのを実感できた月でした。授業では、学期の締めくくりとして取り組んだプレゼンテーションやクラス活動を通して、自分の考えを英語で伝える力が少しずつ確かに育っていることを感じました。また、生活面では、友人やその家族との交流を通して、言葉や文化の違いを越えて人とつながる温かさに何度も触れ、留學生活の意味を改めて考える時間にもなりました。特に、今学期で帰国する友人との別れや、アメリカの家庭で過ごしたクリスマスの経験は、嬉しさと寂しさが入り混じる中で、自分がこの土地

でどれほど多くの人に支えられてきたのかを深く感じさせてくれました。こうした出会いや学びは、教室だけでは得られない、私にとってかけがえのない財産です。

残りの留學生活でも、一つひとつの経験を大切にしながら、ここで得た気づきや成長を次につなげていきたいと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 1月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026年2月9日

新年を迎えたオハイオ州では、気温が氷点下 15 度を下回る日が当たり前となり、厳しい寒さが日常生活の前提として存在しています。朝、家を出た瞬間に感じる刺すような冷氣や、息が白く凍る感覚は、日本で経験してきた冬とは大きく異なり、季節そのものが生活に与える影響の大きさを強く実感させられます。降雪や路面凍結により移動に必要な日も多く、厚手の防寒具や時間配分など、寒さを前提とした行動が求められる毎日です。そのような環境の中で、体調管理に留意しながら学業に取り組むと同時に、自信の生活習慣や考えかとお見直す機会も増えました。本報告書では、こうした厳しい冬を背景に過ごした 1 月の留学生活について、学習面および生活面を中心にご報告いたします。

【学習面】

学部生として新しい学期がスタートし、今学期は General Psychology、Principles of Marketing、Communicative Practices、Communities and Societies、Topics in Marketing; Community-Based Organizations Operations, Innovations, and Communications、そして前期から引き続き Choir を履修しています。今学期は学部の中でも比較的レベルの高い授業を選択しているため、学期始まる前は、英語で専門的な内容を理解し、議論や話題についていけるのかという不安でいっぱいでした。特に、専門用語が多く使用される分野において、自分の語彙力や理解力が十分であるのかについて、強い心理的負担を感じていました。

しかし、実際に授業が始まってみると、教授のサポート体制は想像以上に手厚く、質問や相談がしやすい雰囲気が整っていることに気づきました。また、これまでの留学生活の中で少しずつ身に付けてきたリスニング力のおかげで、「全く理解できない」という状況に陥ることはありませんでした。そのため、学期開始前に抱いていた強い不安は徐々に和らぎ、現在は一定の手応えを感じながら授業に臨んでいます。

一方で、心理学およびマーケティングの授業においては、専門用語の多さが大きな課題となっています。用語そのものの意味を理解するだけでなく、その背景にある理論や前提条件、実際の社会やビジネスの場面でどのように応用されているのかまで把握する必要があり、表面的な理解では不十分ではあると感じています。そのため、授業前には資料を読み込み、重要な概念や用語を整理する予習を行い、授業後にはノートやスライドを見直ししながら内容を再確認する復習を欠かさないよう心掛けています。現時点では、「予習と復習に勝る近道はない」という意識が、学修の基盤となっています。

また、今学期はディスカッションを重視する授業が多く、受け身の姿勢では学習成果を十分に得ることができない環境に置かれていると感じています。自分の考えをその場で整理し、英語で論理的に発言する力が求められるため、内容理解に加えて、発言の準備も重要となり

ます。特に、最終課題として設定されているグループワークでは、個々の学生の貢献度が成果に直結するため、人一倍の準備を怠れば、グループ全体に悪影響を及ぼしかねないという責任感を強く意識するようになりました。

マーケティング関連の授業については、日本で学んできた内容と共通する理論的枠組みが多く見られる一方で、アメリカならではの視点や実践的要素が多く取り入れられている点が印象的です。例えば、実在する企業や非営利団体を題材としたケーススタディ頻繁に用いられ、単なる理論理解にとどまらず、地域社会や社会課題との関係性を踏まえた分析が求められます。このような授業を通して、日本とアメリカにおけるマーケティングの考え方や価値観の違いを具体的に認識することができ、自身の視野が拡張されていると感じています。

中でも特に印象に残っているのは、Topics in Marketing; Community-Based Organizations Operations, Innovations, and Communications の授業において実施した、非営利団体に関する Marketplace Research のプレゼンテーションです。前学期にも発表の経験はありましたが、今回は学部生向けの授業向けの授業でありながら内容の専門性が高く、扱うテーマも社会性の強いものであったため、準備段階から大きな困難を感じました。伝えたい内容を英語で的確に表現することの難しさに直面し、語彙選択や構成について何度も見直しを行いました。

このプレゼンテーション準備において、大きな支えとなったのが ELL(English Language Learner)Support Center の存在です。このセンターでは、プレゼンテーションの資料の構成、文章表現の精緻化、さらには発表練習まで、段階的かつ丁寧なサポートを受けることができました。常駐している大学院生の方々は、学習面だけでなく精神面にも配慮してくださり、「一人で抱え込まず、周囲の力を借りて良い」という安心感を得ることができました。また、ELL Support Center には、日本語専攻の学生や日本語に興味を持つ学生も訪れるため、課題に取り組む合間にアニメや日本文化について話す機会もあります。この場所は単なる学習支援の場にとどまらず、雑談や悩み相談が活発に行われる交流の場でもあり、留学生が集まりやすい環境であると感じています。学習面と生活面の双方において、今学期を乗り越える上で欠かせない拠点となっています。

さらに、Communities and Societies の授業では、コミュニティや社会構造について多角的に考察する中で、自分自身の立場やアイデンティティについて深く向き合う機会を得ました。留学生として異文化の中で生活する自分、日本人としての価値観や背景を改めて言語化することで、自身のアイデンティティを再構築している感覚があります。この授業は、学問的な学びに加えて内省的な学びを促す非常に意義深い授業であると感じています。

また、履修登録期間中には一度だけダンスの授業に参加し、人生で初めてタップダンスを経験しました。Shuffle, Ball Change, Flap, Cramp Roll, Time Step などのように、ステップの種類が非常に多く、短時間で習得することは難しかったです。しかし、慣れない動きに戸惑

いながらも、新しい表現方法に挑戦する楽しさを感じました。同時に、以前 Pittsburgh で
のミュージカルの中で見た、プロとして活動するダンサーの高度な技術と努力に対する尊敬
の念が強まり、自分自身の学びに対する姿勢を見直すきっかけにもなりました。

【生活面】

年末年始には、日本人の方々や、私たちと日頃から関わりのある学生たち、そしてフィン
ドレーに駐在している方々と一緒に、年越しパーティーと新年会を開きました。海外で迎える
年越しは少し不安もありましたが、皆さんと温かい時間を共有できたことで、日本にいる
時と同じような安心感を味わうことができました。特に印象的だったのは、年越しそばを食
べられたことです。今年は無理かもしれないと半ば諦めていたので、実際にそばを囲んで年
越しの瞬間を迎えられた時は、本当に嬉しくて胸がいっぱいになりました。その他にも日本
食をたくさん堪能することができ、異国の地で日本の味に触れられる幸せを改めて感じま
した。

また、「年越しの瞬間に家の周りをフライパンで叩いて回ろう！」という現地人の友人の
発言から、みんなで外に出て賑やかにフライパンを叩きながら新年を迎えました。調べてみ
ると、これは古い民間伝承で、大きな音を立てて悪いものを追い払い、新しい年の幸運を呼
び込むという意味があるそうです。日本の除夜の鐘とはまた違った形で「年を越す」という
文化に触れられ、とても興味深い経験でした。

寒い夜にみんなで笑いながら騒いだあの時間は、留学生活の中でも特に心に残る思い出
のひとつになりました。異文化の中で過ごす年末年始は不安もありましたが、人とのつなが
りや温かさに支えられ、忘れられない新年を迎えることができました。



1月26日および27日、オハイオ州フィンドレーでは大学が休校となりました。今回の休
校は大雪による道路状況のみを理由としたものではなく、極端な低温や体感温度の低下に
よる健康リスク、路面凍結の可能性、今後の悪天候の予測などを総合的に考慮した判断でし
た。私にとっては留学生活の中で初めての休校経験であり、大学からの公式アナウンスを目
にした際は大きな驚きを感じました。日本では警報が発令されても授業が通常通り行われ
る場合が多いため、学生の安全を最優先し、早い段階で休校判断が下される点に、アメリカ

の危機管理意識の高さを感じました。特に、地元である福井県と比較すると、「この程度の雪であれば福井では問題なく生活できるのではないか」と感じる場面もあり、地域ごとの気候条件や雪への慣れ、判断基準の違いを強く実感しました。この経験を通して、同じ自然現象であっても、地域や文化によって受け止め方が大きく異なることを改めて認識しました。

休耕期間中は、授業がない分、自宅で課題に取り組んだり、普段よりも自炊をしたりと、普段とは異なる時間の使い方をすることができました。静かな環境の中で、自分自身の生活リズムや学習習慣を見直す貴重な機会にもなりました。

As of 1:00 p.m., Hancock County is still under a Level 3 Snow Emergency, and we are expecting high winds and low temperatures throughout the night.

Campus will remain **CLOSED for the remainder of the day and Tuesday, 1/27/26**. All activities are canceled.

Please assume that normal operations will resume on Wednesday, January 28, 2026. If that changes, further communication will be shared (See below).



また、地域との関りを実感できた経験として、MAZZA MUSEUM で開催された「Funday Sunday」のイベントに参加しました。Funday Sunday は、子どもや家族連れを主な対象とした地域参加型イベントで、美術館の展示鑑賞に加え、さまざまな体験型アクティビティを通して学びと交流を促すことを目的としています。私が参加した回では、アメリカ建国 250 周年（America 250）を意識した内容がテーマとなっており、アメリカンフラッグを連想させる色彩やモチーフを取り入れた企画が多く見られました。

私は日本文化を紹介するブースを担当し、来場者に向けて折り紙で星を折る方法を教えました。星というモチーフは、今回のテーマやアメリカ国旗とも親和性が高く、日本の伝統文化である折り紙を紹介しながら、イベント全体の趣旨にも自然に沿った形で活動することができました。一方で、折り紙を教える過程では、「山折り」「谷折り」「折り返す」といった折り紙特有の動作を英語でどのように伝えるかに苦戦しました。これらの表現は日本語では専門用語として定着していますが、英語では必ずしも一般的ではなく、特に子ども向けのイベントでは理解しやすい言い換えが求められます。そのため、mountain fold や valley fold といった用語を用いるだけでなく、「自分の方に折る」「向こう側に折る」といった動作を示す説明を加え、実際に手本を見せながら伝える工夫が必要でした。完成した星を手にした子どもたちが嬉しそうな表情を見せてくれたり、「日本には他にどんな折り紙があるのか」と質問してくれたりしたことが特に印象に残っています。この経験を通して、単なる言語の翻訳ではなく、文化や文脈を踏まえた伝え方の重要性を実感しました。また、大学内にとどまらず、地域社会と関わる活動に参加することで、自身の文化的背景が強みとして活かされる場面が多くあることを改めて認識しました。



日本の成人式に出席できないことに対しては、当初より寂しさや心残りを感じていました。しかし、その思いは予想外の形で温かく満たされました。こちらで交流のある日本人の方々をはじめ、地域の方々やフィンドレーに駐在している方々が、実際の誕生日はまだ先ですが、成人の日として私の成人を心から祝ってくださったのです。異国の地で「成人おめでとう」と声をかけていただけたとは思っていなかったため、大きな驚きとともに深い感動を覚えました。特に印象的だったのは、母国語が日本語ではない方々までが、日本語で「おめでとう」と伝えてくださったことです。不慣れな発音でありながらも、心を込めて祝ってくださる姿に、文化や言語の違いを超えた温かいつながりを強く実感しました。日本の成人式に参加できなかった寂しさよりも、ここで祝っていただけた喜びの方が大きく、忘れがたい節目となりました。

また、この日は日本の正月文化を共有する機会として、参加者全員で餅をこねて食べる活動も行いました。みんなで餅をこねる時間は非常に和やかで、出来立ての温かい餅をきなこや醤油で味わった瞬間には、日本の正月の記憶が鮮明によみがえりました。日本人だけでなく、アメリカの方々も興味を持って参加し、「このように餅を作るのか」と楽しそうに話していたことが印象深かったです。文化の異なる人々が同じ作業を通して交流し、同じ食を共有することは、言語以上に人と人を近づける力があると感じました。この一日は、単なる成人のお祝いにとどまらず、異文化環境の中で支えてくださる人々の温かさと、文化交流の意義を深く実感する特別な経験となりました。



日常生活で特に印象的だった出来事として、コモンスペースで課題に取り組んでいた際、特別な繋がりになかった現地学生3名からカードゲームに誘われた経験があります。留学生活

の中で、日本語専攻の学生やハウスメイトといった既存の人間関係以外から自然に声をかけられたのは初めてのことでありませんでしたが、数えるほどしかないとても貴重なことだったので、「留学生」という枠を超えて、一人の学生として受け入れられているのではないかと感じ、強い喜びと安心感を覚えました。

交流を深める中で、彼らが全員 1 年生でありながら Campus Ministry として活動しており、将来についても明確な展望を持っていることを知りました。その姿勢に強い刺激を受け、自分自身も将来をより具体的に見据えて行動する必要があると感じました。そのうちの一人は乗馬専攻で、5 月頃に北海道の酪農学園大学へ約 2 週間留学する予定があり、日本について詳しく知りたいと話してくれました。思いがけない形で日本との繋がりが生まれたことに、驚きと同時に大きな喜びを感じました。

その日は 1 時間半ほどにわたってカードゲームを楽しみ、会話の中で大学から少し離れた場所にあるクレープ店の話題になり、翌日一緒に行く約束をしました。このように、気軽に行動を共にできる関係性は非常に新鮮であり、文化交流という枠を超えて、対等な立場で人と繋がれていると感じられる貴重な経験となりました。

その後も、その学生たちとはキャンパス内で会う度に長く立ち話をしたり、頻繁に遊びに誘ってもらったりする関係が続いています。多くの学生との関係があいさつ程度で終わる中で、このように継続的な交流が生まれていることは、私の留学生活において大きな支えとなっています。



以上の経験を通して、異文化交流における学習と生活の両立の厳しさと同時に、自身の適応力や成長を実感することができました。留学生活も残り約 3 か月となりましたが、限られた時間だからこそ、一つ一つの出会いや経験を大切に、学習面・生活面の双方において悔いの残らないように過ごしていきたいと考えています。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 2月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026 年 3 月 7 日

日本では立春を過ぎ、暦の上では春の訪れを意識する季節となりました。ここオハイオ州でも、先月のようなマイナス 10 度を下回る極端な冷え込みの日は少しずつ減り、冬の終わりが微かに近づいていることを予感させます。興味深いのは、自分自身の身体的な感覚の変化です。日本にいた頃は、気温が 0 度を下回るだけで耐えがたい寒さ感じていましたが、今ではマイナス 5 度程度であれば「今日は比較的過ごしやすい」とさえ感じるようになりました。過酷な環境に身を置く中で、自身の感覚が現地に適応していく過程を肌で実感しており、こうした適応能力の向上も、異文化環境という「非日常」を「日常」へと変えていく留学の醍醐味であると感じています。

この環境への慣れとともに、心境も「環境への適応」から一歩踏み出し、今月は「主体的な発信と交流」をテーマに過ごした活動内容をご報告いたします。

【学習面】

学業においては、講義形式の学びに加え、学外での実践的なアウトプットに注力しました。特に印象深い活動は、Communicative Practices の授業の一環として、地域の公共図書館（Public Library）で実施した、家族連れを対象とした日本文化紹介イベントです。計 2 回の開催を、企画段階から当日の運営まで日本人留学生である私たちが自ら主体となって担いました。

1 回目は、埼玉県川口市のアートプロジェクトである「ワタリドリプロジェクト」に関連し、メッセージを託すワタリドリの制作ワークショップを行いました。また、バレンタインが近かったこともあり、折り紙のハート作りも併せ、日本の手仕事の楽しさを伝えました。2 回目には「トントン相撲」を導入し、折り紙で力士を作る工程から、日本語で名前や自分の趣味を平仮名・カタカナ・漢字で書いてもらう体験を提供しました。「山折り・谷折り」といった折り紙特有の動作を、英語で噛み砕いて説明することには非常に苦労しましたが、実際に手本を見せながら「Fold it toward you（自分の方に折って）」といった具体的なジェスチャーを交えることで、言語の壁を越えたコミュニケーションが可能であることを学びました。

また、美術館（MAZZA MUSEUM）での「Funday Sunday」にも継続して参加しました。今月のテーマは「ジャングル」だったため、魚を折るワークショップを担当しましたが、回を重ねるごとに英語での指示出しが円滑になり、地域社会の教育活動に直接貢献できているという手応えを深めています。



また、今月の学習面において最も意義深かったのは、2月21日の「国際母語の日 (International Mother Language Day)」を記念して開催された、大規模な学内イベントの企画・運営に携わったことです。

この「国際母語の日」は、1952年にバングラデシュで起こった、母語であるベンガル語を公用語として認めるよう求めた学生たちの運動が起源となっています。自らのアイデンティティの根幹である母語を守るために犠牲になった人々を追悼し、ユネスコが言語的多様性と多言語教育の重要性を訴えるために制定した、きわめて重厚な人道的メッセージを持つ記念日です。

私は今回のイベントにおいて、私を含めた日本人学生2名、そして他国から来た留学生2名の計4名による実行委員の一員として、イベント全体の主催・運営に深く関わりました。当日の式典は、フィンドレー市長の Christina Muryn 氏や、学術界を代表する Dr.Chris Denecker 氏といった、地域のリーダーたちが列席し、祝辞を述べるという、非常に格式高い場となりました。市長の言葉からは、オハイオの地域社会においても、多様な言語を話す住民が共生することの重要性が説かれ、大学がその多様性の拠点であるという強い期待を感じ、主催者の一人として身の引き締まる思いがしました。

プログラムは多国籍な熱気に溢れ、ラオ語や日本語によるキリスト教の祈りに始まり、ネパール、インド、韓国、イタリア、台湾の学生たちによる歌の披露、ベトナムやトルコの学生による叙情的な詩の朗読などが次々に行われました。

日本からの出し物も非常に充実しており、伝統的な和太鼓の迫力ある演奏や、HIP-HOP、J-POP に合わせたダンス、けん玉の披露、さらには日本の食と言葉を繋ぐおにぎりの配布など、多角的に自国文化を発信しました。特に印象的だったのは、現地の学生たちが日本のアイドルダンスを全力で披露した場面です。現代のポップカルチャーが言語の壁を軽やかに飛び越え、異なるルーツを持つ人々を一つにする瞬間を目の当たりにし、深い感動を覚えました。

市長や大学関係者が見守る中、多様な言語の響きを肌で感じることで、言語とは単なる伝達手段ではなく、個人の魂や歴史そのものであると強く再認識しました。他者の母語を尊重することは、その人の尊厳を守ることと同じであるという、社会学の根幹に関わる深い気づきを得ることができました。



【生活面】

今月の生活で非常に印象深く、自分の考え方を大きく変えるきっかけになったのは、キャンパス内でひととき目立つ存在のアメリカンフットボール部（以下、アメフト部）の学生たちとの交流です。

彼らは非常に体格が良く、集団で固まって行動していることが多いため、正直に言えば最初は近寄りがたく、威圧感さえ覚えてしまう存在でした。それでも持ち前の好奇心から、「あんなにストイックに打ち込んでいる人たちは、普段どんな生活をしているのだろう？」という興味もずっと抱いていました。そんな時、学食で一人の学生が、授業で習っている日本語について質問してくれたことをきっかけに、アメフト部の子たちと話す機会が増えました。それまでは、彼らが片言の日本語で「こんにちは」と声をかけてくる様子に対し、「からかわれているのではないか」という不安や、コミュニケーションの意図が掴めないもどかしさを感じることもありました。しかし、共に食事を囲み、対話を重ねる中で、彼らが日本という国に深い関心を持ち、誠実に歩み寄ろうとしてくれていることが理解でき、私の中にあった心の壁は次第に解けていきました。

何より嬉しかったのは、彼らが日本の食べ物やアニメに対して非常に強い興味を抱いてくれていたことです。学食では、「NARUTO と ONE PIECE のどちらが最高の作品か」などというテーマで熱い論争が巻き起こるほどで、彼らにとって日本文化が身近でポジティブな存在であることを知り、日本人として誇らしい気持ちになりました。

また、彼らとの対話を通して、アメリカの大学スポーツを統括する NCAA（全米大学体育協会）の仕組みについても深く学びました。NCAA には 3 つのディビジョンがありますが、これは大学の意思だけで決まるものではなく、「提供するスポーツの種目数」「各スポーツに割り当てる奨学金の総額」「学生数や財源規模」「試合会場の収容人数（D1 のみ）」といった、組織運営上の厳しい基準を満たしているかどうかで区分されています。

- ・ディビジョン 1（D1）： 男女各 7 種目以上の競技を保持し、大規模なスポーツ奨学金予算を持つ「アスリート養成・興行」の最高峰。
- ・ディビジョン 3（D3）： 男女各 5～6 種目以上を保持するが、スポーツ推薦による奨学金が「一切禁止」されており、学業とアマチュア精神を最優先とする。

・ディビジョン 2 (D2)： 本学が所属する区分で、男女各 5 種目以上を保持しつつ、スポーツ奨学金制度も維持する。D1 のような商業的規模ではなく、地域社会との繋がりや「アスリートとしての成長と学位取得の両立 (Life in the Balance)」を組織の理念として掲げている。

この区分では、競技の実力に応じたフルスカラーシップが認められる一方で、学生アスリートとしての GPA 維持が義務付けられています。学費や食費、高額な教科書代まですべてを実力で勝ち取っているエリート学生であっても、基準の成績を下回れば即座に試合出場資格を失うというプレッシャーの中で日々を過ごしています。才能に甘んじることなく、自分を厳しく律して「文武両道」を体現しようとする彼らの真摯な姿を知り、今ではアスリートとして、そして一人の学生として心から尊敬しています。

ただ、仲良くなる過程で、アフリカ系アメリカ人の友人から「日本人は自分たちのようなルーツを持つ人々に対して、否定的な先入観を抱いているというのは本当か？」という、非常に切実な問いを投げかけられる場面がありました。親睦を深めたいと願っていた矢先に、そのような根深い問題に触れる質問を受け、その言葉に私は深い悲しみを覚えるとともに、世界に根深く残るステレオタイプの弊害を突きつけられた思いがしました。外面だけで判断されているのではないかという彼らの不安を知り、私は「決してそうではないこと、一人の人間として向き合いたいこと」を誠実に伝えました。今では人種や国籍という枠組みを超え、対等な友人として笑い合える関係を築けており、自らコミュニティの中に飛び込み、対話を試みることの重要性について身をもって学びました。

アメリカが熱狂するスポーツ文化を体感する機会も多くありました。特に、車で片道 2 時間をかけて Canton に応援に向かった水泳の Great Midwest Athletic Conference では、フィンドレー大学水泳部の圧倒的な実力と、会場が揺れるような熱気に圧倒されました。男女共に 4×50m リレーでの優勝をはじめ、多くの選手がメダルを手にする姿を間近で見ることができ、同じ大学の一員として誇らしい気持ちになりました。また、学内の巨大スクリーンで Super Bowl を観戦し、Bad Bunny によるハーフタイムショーを楽しみながら現地学生と共に熱狂する時間は、まさにアメリカならではのダイナミズムを感じる経験でした。



2月の大きなイベントと言えばバレンタインデーですが、アメリカでは男性から女性へ花束やプレゼントを贈るのが一般的です。その中で私は日本人の友人と共に、日頃お世話になっている人たちに感謝を伝えるため、クッキーとブラウニーを手作りしました。日本には本命だけでなく、「友チョコ」「義理チョコ」という独自の文化があることを紹介しました。さらに、日本の伝統行事である「節分」にちなみ、現地の友人たちと「恵方巻」の文化を楽しみました。全員で同じ方向を向いて黙々と食べ続けるという、傍から見れば少しシュールな光景に、最後は耐えきれず笑いが漏れてしまいましたが、沈黙の中で願いを込めるという日本の精神性の一端を共有できる良い時間になりました。また、友人たちに誘われアイススケートやインドアゴルフにも挑戦しました。苦手意識のあったスケートでは、友人たちの献身的な支えにより、最終的には壁に頼らず自力で滑ることができるようになりました。未知の経験に対し、勇気を持って一歩踏み出し、周囲の助けを借りることで苦手を克服できるという経験は、留学生活全体に通じる大きな自信となりました。



他にも、福井県立大学看護学部から来学した4名の学生と、今学期から日本語を学び始めた現地学生との交流を深めるため、私が主体となってスポーツ交流イベントを企画しました。ピックルボールやバスケットボールを通じて、初対面の学生同士が打ち解ける場を作ることができ、企画者として大きな達成感を得ました。

健康管理の面では、最近寝不足が続いていたり、怠惰な生活を送ってしまっていたりするように感じたので、週末の早朝に気合を入れて、雪の中を往復1時間かけてカフェに行きました。静寂の中を歩き、カフェに集まる人々の活気に触れることで、心身ともに引き締まる思いがしています。また、高カロリーな食事による影響を考慮し、ジムでのトレーニングも一日二回取り入れるなど、習慣化しました。



今月の活動を振り返ると、伝統行事やスポーツ制度といった目に見える文化の理解だけでなく、人種や先入観といった心の深部にある問題に一步踏み込めた一か月であったと感じています。異なる文化を持つ者同士が真に理解し合うためには、表面的な知識だけでなく、勇気をもって心を開き、対話を重ね続けることが不可欠であると身をもって学びました。留學生活も残り約三か月となり、終わりが少しずつ見えてきました。慣れからくる慢心に注意しつつ、残された一日一日を全力で駆け抜けたと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 3月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026 年 4 月 8 日

オハイオ州の3月は、まさに「三寒四温」という言葉が相応しい季節です。凍てつくような冬の厳しさが名残惜しそうに居座る一方、ふとした瞬間に鼻をくすぐる柔らかな風が、春の訪れを予感させます。アメリカでは、”March comes in like a lion and goes out like a lamb”（3月はライオンのように荒々しく始まり、子羊のように穏やかに去る）と言われますが、私の心境もまた、挑戦の嵐から深い充足感へと変化していく、極めて密度の高い1か月となりました。

【学習面】

・ International Night

留学生が開催するイベントの中でフィンドレー大学最大級の祭典が International Night です。私は日本代表として、静と動が交錯する書道パフォーマンスに挑みました。私たちが揮毫したのは「フィンドレー大学 ありがとう 一期一会」という言葉です。英訳担当も含め、6人で披露しました。演出の要となったBGMには、「愛♡スクリーム！」の楽曲を採用しました。彼女たちの楽曲は、SNSで「ルビーちゃん？はい！」という中毒性のあるフレーズから始まるミームとしてアメリカでも大流行しています。日本語学習者の皆さんがリズムに乗って、弾けるような笑顔でダンスを披露してくれている中、私たちはその熱量に呼応するように筆を走らせました。彼らの躍動感あふれる動きが、会場の視線を釘付けにし、ステージ全体のボルテージを引き上げてくれました。私は日本語で「ありがとう」の5文字を担当しました。たすき掛けをピシッと締め、舞台に立った瞬間の凛とした空気感は、今でも覚えています。練習では完璧だった行程も、本番特有の熱気や、時間の制約というプレッシャーがあり、とても緊張しました。ダンスがフィニッシュを迎えるのと同時に、私が最後の一面を書き終えた瞬間、会場は喝采に包まれました。日本人学生と日本語学習者が、言葉や文化の枠を超えて一つの表現を完成させたあの瞬間の達成感、一生忘れられない宝物です。

また、ステージ外の交流ブースでも、日本の今と伝統を体験してもらうために工夫を凝らしました。日本のソウルフードとして「ツナマヨおにぎり」を提供したのですが、意外にもアメリカの学生たちから人気で、用意していた分は瞬く間に完売しました。さらに、食品ブースの隣では、箸を使って小豆を移し替えるチャレンジコーナーを設置しました。今回は、小豆の代わりにビーズなどを用いました。おぼつかない手つきで苦戦しながらも、コツを掴んだ瞬間に満面の笑みを浮かべる子どもたちの姿が印象的でした。

ブース運営の合間を縫って、多国の文化も堪能しました。特にロシアのクレープ（Blini / Блины）の素朴な甘さや、ベトナムの Bò Bía（生春巻き）の鮮やかな食感には、そ

の土地の歴史や風土が凝縮されているようで、深い感銘を受けました。現地でマーケティングを学ぶ者として、その国特有の味や音楽がいかに強力なブランドとなり、言葉を越えた共感を生むかを肌で学びました。この夜に感じた多幸感と、未知の文化への知的好奇心は、将来お金を貯めて世界各国を飛び回り、自分の目で世界を確かめたい、という私の夢により具体的な輪郭を与えてくれました。



・ Children mentoring

Communicative Practice の授業の一環として、日本の留学生が主体となり、現地の子どもたちを対象とした日本式の運動会を企画、運営しました。アメリカの個人主義的な競争文化とは異なる、日本の運動会特有の「一致団結」という概念を体験してもらう良い機会になったと思います。玉入れ、綱引き、大縄跳び、大玉転がしといった種目を通じ、全員で協力して目標を達成する喜びを伝えることに注力しました。言葉だけでは伝わりにくいルールも、身振り手振りを交えて熱心に指導し、子どもたちも次第にチーム一丸となって勝利を目指すようになりました。フィナーレには、全員で大きな円を描きマイムマイムを踊りました。会場が子どもたちの無邪気な笑顔で満ち、人種や言語を超えた一体感を身をもって感じました。



【生活面】

・ Choir concert trip in Europe

Spring break を利用し、Choir のクラスでドイツとチェコの二か国へコンサートツアーに行きました。この旅は、単なる観光ではなく、音楽を通じて歴史の重要性に触れる貴重な経験となりました。

今回の遠征は、目的地での経験だけでなく、そこに至るまでの移動の中にも、留学生活の本質を象徴するような忘れがたい出来事がありました。出発のデトロイト空港

(DTW) でのセキュリティ・チェック (TSA) の長蛇の列は、遠征への高揚感を少しだけ削ぐような、退屈で長い待ち時間になるはずでした。しかし、そこで私の前後に並んでいた見知らぬ人々とした会話がその時間を一変させました。驚いたことに、その方々は日本と非常に深い関りを持っておられました。アメリカの空港のど真ん中で、偶然知り合った人々と日本語で温かな談笑が始まった瞬間、世界がいかに狭く、そして温かいものであるかを痛感しました。「日本から来たの?」「私は以前あそこに住んでいてー。」そんな何気ない会話が、出発前の緊張を解きほぐしてくれました。本来なら通り過ぎるだけの他人になり得る人が、共通の言語や背景を通じて知人に変わる。このような出会いは、この後のドイツ・チェコへの旅が素晴らしいものになるという、何よりの予兆に感じられました。

また、今回の遠征で観光以上に私の魂を揺さぶったのは、ドイツとチェコの両国で、現地の大学生合唱団と行った共同コンサートでした。国籍も、育ってきた背景も、普段話す言葉も全く異なる私たち。しかし、同じ一冊の楽譜を広げ、指揮者がタクトを振った瞬間、そこには一切の境界線が無くなりました。何週間も前からそれぞれが練習してきた旋律が、初めて出会ったその場で重なり合い、巨大なハーモニーとなって教会の高い天井へ吸い込まれていくような圧倒的な響きの中に身を置いたとき、言葉では表現しきれない感覚になり、鳥肌が立つような感動に包まれました。

【観光】

・ フランクフルト旧オペラ座 (Alte Oper Frankfurt / Alte Oper):

戦火で「ドイツで最も美しい廃墟」と呼ばれたこの建物が、市民の寄付によって 1981 年に再建された背景には、文化を何よりも尊ぶドイツ人の矜持を感じました。時間の都合上、内部に足を踏み入れることは叶いませんでしたが、外観からさえも設計の緻密さとルネサンス様式の美しさに圧倒され、かつて爆破して駐車場にする案があったという逸話が信じられないほどの神聖さを湛えていました。



・ クラインマルクトハレ市場 (Kleinmarkthalle Market / Kleinmarkthalle):

約 150 もの店がひしめくフランクフルトの台所と呼ばれる場所です。市場独特の生ハムやスパイスの混じった香りに包まれ、ドイツ人の生活の力強さを感じました。本場フランクフルター・ソーセージ(Frankfurter Würstchen) の定義が、羊の腸の使用とブナの木でのスモークにあると学び、マーケティングの視点からもブランドの正統性を維持することの重要性を再認識しました。



• フランクフルト大聖堂 (Frankfurt Cathedral / Kaiserdom St. Bartholomäus) & レーマー広場 (Römerberg Square / Römerberg):

高校時代に世界史を専攻していた私は、フランクフルト大聖堂を訪れた際にすごくテンションが上がりました。世界史の授業で習った、あのカール大帝ゆかりの地。1356年の金印勅書以降、ここは神聖ローマ帝国の皇帝選定の場となり、1562年からは戴冠式も行われるようになったと学んだことを思い出し、懐かしく感じました。皇帝の戴冠式が行われた大聖堂の重厚な石の壁は、何世紀もの権力の変遷を静かに物語っていました。広場の正義の泉 (Gerechtigkeitsbrunnen) を見つめながら、かつて新皇帝の戴冠式が行われた際、ここから水ではなくワインが溢れ出したという祝祭の熱狂に思いを馳せると、教科書の中だけの存在だった神聖ローマ帝国という巨大な歴史の枠組みが、目の前の重厚な建築と繋がりととても感動しました。



• ヴュルツブルクのレジデンツ (Würzburg Residenz / Würzburger Residenz):

ユネスコ世界遺産を訪れることができたことをすごくうれしく思います。階段の間 (Treppenhaus) にあるジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ (Giovanni Battista Tiepolo) による巨大なフレスコ天井画を見上げた瞬間、飛行機での長旅による首の痛みも忘れるほどの衝撃を受けました。支柱のない広大な空間に描かれた四大陸の擬人化。大戦

の空襲でもここだけが崩れなかったという事実は、もはや奇跡としか言いようがなく、芸術が持つ不思議な生命力を感じさせました。



• プラハ城 (Prague Castle / Pražský hrad) & 聖ヴィート大聖堂 (St. Vitus Cathedral / Katedrála svatého Víta):

山の上にそびえ立つその姿は、お城というよりは一つの完成された街のようで、ギネス記録に載る世界最大級の古城という説明にも納得の壮大さでした。特に、城の中心に鎮座する聖ヴィート大聖堂は、空を突き刺すようなゴシック様式の尖塔が圧巻で、何世紀にもわたって増築を繰り返してきた歴史の重みが外壁の色からも伝わってきました。大聖堂にあるアルフォンス・ミュシャ (Alphonse Mucha) のステンドグラスは、通常のパッチワークのような技法ではなく、ガラスに直接絵を描く技法が取られており、その手法でこそ実現できる、繊細なグラデーションに圧倒されました。光が差し込むと床一面に色が散らばり、万華鏡の中に迷い込んだような不思議な感覚に包まれました。中世から続く権威の象徴としての力強さと、繊細な芸術が見事に融合した、プラハの至宝と呼ぶにふさわしい光景でした。



• カレル橋 (Charles Bridge / Karlův most) & 天文時計 (Prague Astronomical Clock / Pražský orloj):

ヴルタヴァ川 (モルダウ川) に架かるこの橋は、ローマ皇帝カール4世によって14世紀に築かれた、まさにプラハの象徴です。橋に並ぶ聖ヤン・ネボムツキー像 (Statue of St.

John of Nepomuk) のレリーフに多くの人が集まっていたことが、すごく印象に残っています。台座にあるレリーフに触れると幸運が訪れる、再びプラハに戻ってくることができるという言い伝えがあり、長い年月を経て多くの人に撫でられたその場所だけが黄金色に輝いていました。私も再訪を願いその冷たい金属に触れましたが、過去の人々と願いを共有したような不思議な感覚になりました。また、1410 年設置の天文時計で、毎正午、死神が鐘を鳴らし十二使徒が現れる仕掛けを、広場の人々と沈黙して見守った時間は忘れられません。600 年以上も前から変わらず人々の目を楽しませ、時間を刻み続けてきた精密な技術への畏怖と、それを守り抜いてきたプラハの人々の愛着を強く感じた瞬間でした。



・ 聖バルトロメイ大聖堂 (St. Bartholomew's Cathedral / Katedrála sv. Bartoloměje):

チェコで最も高い 102.26 メートルの塔を持つこの大聖堂は、街のどこにいてもその存在を感じさせる圧倒的なランドマークでした。塔の上から見下ろしたピルゼンの街並みは、歴史ある建築と近代的な活気が混ざり合い、快晴の日には遠くアルプスまで見渡せるという空に最も近い場所としての神聖さを肌で感じました。



・ フラデツ・クラロヴェー (Hradec Králové) の 白い塔 (White Tower / Bílá věž) & 聖霊大聖堂 (Cathedral of the Holy Spirit / Katedrála svatého Ducha):

白い塔と呼ばれながらも、実際には現地の砂岩が年月を経て温かみのある黄色を帯びている姿が印象的でした。10 トンもの重さがある鐘が鳴り響くたび、中世から変わらぬ街の鼓動を足の裏から感じ、隣接する聖霊大聖堂のレンガ造りの美しさと相まって、この街が

歩んできた堅実な歴史の重みを実感しました。

- **ロブコヴィツ宮殿 (Lobkowitz Palace / Lobkowiczský palác):**

プラハ城の敷地内にあるこの私立美術館で、ベートーヴェンの交響曲第3番『英雄』や第5番『運命』の直筆楽譜を目の当たりにしました。天才たちが葛藤の中で書き込み、何度も修正を重ねた力強い筆跡を見た瞬間、私たちが今 Choir として歌っている一音一音が、長い歴史の糸で紡がれているのだという深い感動を覚えました。

- **巨大回転カフカの像 (K de Franz Kafka / Hlava Franze Kafky):**

45 トンもの巨大な銀色の頭が、42 枚の層に分かれてバラバラに回転し続けるこの像は、中世の面影が残るプラハの街中で異様な存在感を放っていました。実はこれほど巨大でありながら最新のプログラムで制御されており、滑らかにうごめく様子はどこかハイテクな生き物のようにも見えました。面白いのはその設置場所で、あえて市役所の目の前に置かれています。意見が二転三転して話が通じない「お役所仕事」を皮肉るために、あえて顔がバラバラに崩れる像を役人たちの窓の前に突きつけたという、チェコらしいブラックユーモアに溢れた説があると、現地の友人が教えてくれました。表面はピカピカの鏡面仕上げになっているため、回転に合わせて自分や周囲の街並みが歪んで映り込み、自撮りをしようとすると自分の姿が巨大な顔に飲み込まれていくような不思議な感覚を味わえるのも魅力です。夜にはライトを反射して怪しく光りながら回転し、暗闇の中で巨大な顔が形を変え続ける様子は、少しホラーチックで圧倒的なインパクトがありました。



今回の遠征で最も感銘を受けたのは、ドイツやチェコにおける環境保全への徹底した姿勢です。街中では、空のペットボトルや瓶を回収マシンに戻すとデポジットが返金される「ファンド (Pfand)」という制度が生活に完全に溶け込んでいました。また、欧州全体で義務化されている本体から離れないペットボトルのキャップ (Tethered Caps) にも驚きました。最初は飲みづらさに戸惑いましたが、これはポイ捨てを防ぎ、海洋プラスチックを減らすための確固たる意志の表れです。こうした小さな不便さをあえて受け入れ、未来を

守ろうとする環境先進国としてのプライドを肌で感じました。

食文化においても、その土地ならではの知恵と衝撃が詰まっていました。ドイツで味わった、表面の皮がバリバリに焼かれたローストポーク「シュヴァイネクルステンブラーテン (Schweinekrustenbraten)」の迫力は凄まじかったです。チェコでは、牛肉に野菜のクリーミーなソースと克蘭ベリージャムを添える「スヴィーチコヴァー (Svíčková na smetaně)」や、もちもちとした茹でパン「クネドリキー (Knedlíky)」を堪能しました。特に、生のニンニクを揚げパンに直接擦り付けて食べる「タタラーク (Tatarák)」のワイルドなスタイルには圧倒されました。

何より驚いたのは、チェコの人々のビール (Pivo) に対する情熱です。一人当たりの消費量が 30 年連続世界一というだけあって、レストランでは本当に水よりビールの方が安いという現象を目の当たりにしました。現地では栄養価の高さから「流れるパン」とも呼ばれ、ジョッキのほとんどをクリーミーな泡だけで満たす「ムリーコ (Mlíko)」という独特な注ぎ方を楽しむ文化もあり、日本のビール観を覆されるような新鮮な発見の連続でした。

そんな異国の刺激と、環境を慈しむ静かな街並みに囲まれて過ごす中で迎えた 20 歳の誕生日は、私にとって一生の宝物です。日本から遠く離れた地で、一緒に切磋琢磨してきた仲間たちが 20 歳になる瞬間を歌ってお祝いしてくれました。歴史ある街並みを背景に、音楽を通じてより絆が深まったと思います。温かい祝福に包まれて大好きな友人たちと美味しい料理を囲んだあの時間は、どの観光名所よりも輝いて見えました。また、この旅で見つけた数々の発見と、仲間との揺るぎない絆は、私にとって最高に贅沢なプレゼントになりました。帰国まで残り少ない時間を悔いの無いよう過ごしたいです。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

春の穏やかな気候から初夏の気配へと移り変わる季節となりました。フィンドレーのキャンパスでも日差しが一段と明るくなり、新緑が広がっています。朝晩はまだ少し肌寒さが残るものの、日中は過ごしやすく、外で過ごす時間が心地よく感じられるようになってきました。学期末を迎え、課題や試験に迫られる慌たしさの中にも、これまでの時間を振り返る機会や、仲間との別れを実感する場面が増えてきました。本レポートでは、4月の留学生生活を学習面と生活面の両面から振り返り、その中で得た学びや経験について詳しく報告いたします。

【学習面】

4月は、これまでの学びを実践として形にする機会が多く、単に知識を身につけるだけでなく、それをどのように応用し、他者に伝えるかという点において大きな成長を感じた時期でした。

まず、Marketing 400の授業では、「American 250」をどのように学内で広めるかというテーマでグループワークに取り組みました。この課題では、予算が0ドルの場合と500ドルの場合という異なる条件で戦略を考える必要があり、それぞれの制約の中でどのように効果を最大化するかが重要なポイントでした。

0ドルの場合には、SNSを活用した拡散や口コミの促進、学生同士のネットワークを利用した情報共有など、人のつながりを中心としたアプローチを考えました。実際に、どのような投稿が人の関心を引くのか、どのタイミングで情報を発信するのが効果的かなど、細かな点まで議論を重ねました。一方で、500ドルの予算がある場合には、ポスターやフライヤーの作成、キャンパス内でのイベント開催など、視覚的・体験的に訴える方法を取り入れることが可能となりました。この違いを比較することで、同じ目的であっても条件によって最適な戦略が大きく変わることを実感しました。

また、グループワークの中で意見をまとめる難しさも感じましたが、その分、自分の考えを論理的に説明する力や、他者の意見を取り入れながら最適解を導く力を養うことができました。

Marketing 220 の授業では、これまでに学んだ経営戦略をもとに、新しいビジネスアイデアを考案しました。私たちのグループは、フィンドレー大学内に 24 時間営業のカフェを設置するという提案を行いました。夜遅くまで利用できる場所が少ないという学生の不便さに着目し、その課題を解決する形でアイデアを発展させていきました。

このカフェでは、静かに勉強できるスペースと、友人同士で会話できるスペースを分けることで、それぞれの目的に応じた利用ができるようにしました。また、ドライブスルーやテイクアウト、アプリでの注文システムを導入することで、利便性を高める工夫も取り入れました。こうした細かな設定を考えていく中で、実際に利用する人の立場に立つことの重要性を強く感じました。

Communities and Societies の授業では、「Unsung Hero」をテーマにプレゼンテーションを行い、私は Wat・Misaka さんについて発表しました。彼の功績だけでなく、その時代背景や社会的な状況を理解することが重要であると感じ、調査を進めました。この経験を通して、多様性とは単に違いを認めるだけでなく、その背景を理解することが重要であると学びました。

さらに、Choir のラストコンサートは、学習面の中でも特に心に残る経験でした。最後の一曲では、卒業するメンバーとインターナショナルの学生がソロパートを担当し、それぞれの思いを込めて歌いました。歌っている最中、これまでの練習や日々の出来事が頭に浮かび、自然と感情が込み上げてきました。曲の終盤に差しかかるにつれて、「この時間が終わってしまう」という実感が強まり、寂しさと同時に達成感も感じました。音楽を通して人とつながる経験の大きさを改めて実感しました。



【生活面】

生活面においては、一つひとつの出来事をただ経験するのではなく、「その場にいたか

からこそ感じられたこと」を意識する機会が多くありました。

まず、ナイアガラの水fallsを訪れた経験は、これまでの中でも特にスケールの大きさを感じた出来事でした。私はアメリカ側とカナダ側の両方から滝を見ましたが、それぞれで印象が大きく異なっていた点が非常に興味深かったです。

アメリカ側から見たときは、水の流れのすぐ近くまで行くことができ、滝の迫力を間近で体感することができました。特に、水が落ちる音の大きさや、常に上がり続ける水しぶきの量は想像以上で、視覚だけでなく音や空気の湿り気まで含めて、全身でその迫力を感じることができました。一方で、カナダ側から見ると、滝全体を広い視点で眺めることができ、いわゆる「ナイアガラらしい景色」を一望することができました。特にホースシュー滝のカーブがはっきりと見え、水の量やスケールの大きさをより客観的に感じることもできました。同じ滝でも、見る場所によってここまで印象が変わるのかと驚きました。

また、「Maid of the Mist」という船に乗り、滝のすぐ近くまで行く体験もしました。乗船時にはレインコートが配られましたが、それでも全身が濡れるほどの水しぶきがかかり、想像以上に迫力のある体験でした。船が滝に近づくにつれて視界がほとんど水しぶきで覆われ、周囲の景色が見えにくくなるほどで、まさに自然の力の中に入り込んでいるような感覚でした。この体験を通して、写真や映像では伝わらないスケール感や臨場感を実際に体で感じることの重要性を実感しました。



また、Kings Islandを訪れた際の体験は特に印象的でした。中でも私のお気に入りになったのは「Orion」というジェットコースターです。遠くからでも分かるほど高くそびえるコースを見たときは正直かなり怖さもありましたが、実際に乗ってみると、その印象は一気に変わりました。最初の頂上にゆっくり引き上げられる時間の静けさと、その直後に一気に落下する瞬間のギャップがとても強く印象に残っています。落ちる瞬間、視界が一気に開けて空に投げ出されるような感覚があり、それがただ怖いだけではなく「楽しい」と感じられるのが不思議でした。

また、実際に他のジェットコースターに乗る中で、前列と後列で体感がかなり違うことにも気づきました。前列では視界が開けていて「これから落ちる」というのが見える分、緊張感が強く、後列では引っ張られるように急加速する感覚がより強く残りました。こうした違いを友人と話すことは非常に楽しく、待ち時間さえも含めて一つの体験になっていた

ました。さらに、乗り終えた直後に全員で「今のやばかったよね」と同じリアクションを繰り返しているのに、毎回新鮮に盛り上げられることも印象的でした。このような一見些細なやり取りこそが、後から思い返したときに強く記憶に残るのだと感じました。



次に、デトロイトで参加したデミ・ロヴァートのコンサートも非常に印象に残っています。特に印象的だったのは「Heart Attack」で、イントロが流れた瞬間に会場の空気が一気に変わり、観客の歓声の大きさが一段階上がったのを感じました。ライブでは原曲よりも力強く歌い上げられており、高音部分もブレることなく響いていたことが強く印象に残っています。また、「Skyscraper」のパフォーマンスでは、会場全体が静まり返り、観客一人ひとりが歌に集中している空気を感じました。照明が落ち、スポットライトだけが当たる中での歌唱は、音源で聴くのととは全く異なる迫力があり、その場にいるからこそ感じられる緊張感と一体感がありました。さらに、曲ごとに衣装や演出が変化し、単なる歌唱だけでなくショーとして完成されている点も印象的でした。観客がスマートフォンのライトを点ける場面では、会場全体が一つの空間としてつながっている感覚があり、言葉や国籍を超えて同じ時間を共有しているという実感を持ちました。



FUKUVI USA, INC. への企業訪問も、自分にとって特別な意味を持つ経験でした。私は福井県の奨学生としてこの留学に参加しており、フクビ化学工業株式会社は福井県に本社を持つ企業です。そのアメリカ拠点で FUKUVI USA を訪問できたことは、単なる企業見学以上の意味を持っていました。

福井県の奨学制度は、地域の人材育成や国際経験の促進を目的としており、将来的に地域や社会に貢献できる人材の育成を目指しています。そのような背景の中で、自分と同じ地域にルーツを持つ企業が海外でどのように事業を展開しているのかを実際に見ることができたことは、大きな学びとなりました。

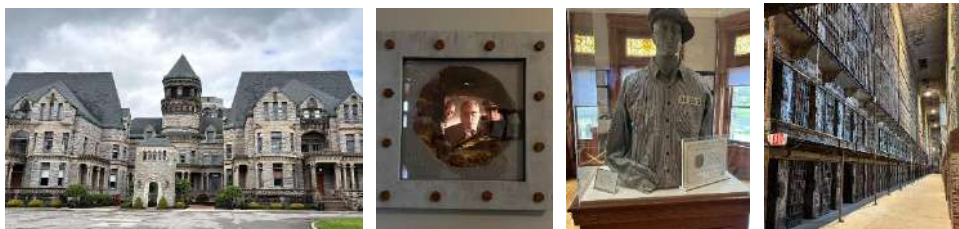
現地では、製品や事業内容の説明だけでなく、海外で事業を行う上での課題や工夫についても話を聞くことができました。



さらに、映画『ショーシャンクの空に』のロケ地であるマンスフィールドを訪れた経験も非常に印象的でした。実際に訪れたオハイオ州立矯正施設は、想像以上に大きく、外観からすでに独特の重厚感がありました。

建物の中に入ると、長く続く廊下や高い天井、そして規則的に並ぶ独房の光景が広がっており、そのスケール感に圧倒されました。特に印象的だったのは独房の狭さで、実際に中に立ってみると、一人が生活するには非常に閉鎖的で圧迫感のある空間であることを強く実感しました。

また、アンディの独房として使われた場所では、ポスターが貼られていた壁なども再現されており、映画のシーンがそのまま現実と重なる感覚がありました。観光地でありながらも、場所自体が持つ歴史的背景や静けさが残っており、単なる観光とは異なる緊張感がありました。さらに、場所によって光の入り方や空気感が異なり、明るく開けた場所と暗く閉ざされた場所の対比が非常に印象的でした。映画の中で感じていた「希望」と「閉塞感」のコントラストが、この空間そのものに表れているように感じました。



4月後半は、多くの学生がキャンパスを離れる時期でもあり、別れの時間が増えていきました。忙しい中でも時間を作り、一人ひとりと向き合うことを意識しました。手紙を書き、折り紙のハートを添えて渡した際に涙を流してくれる友人もあり、自分が築いてきた

関係の深さを実感しました。



4月は、経験の一つひとつに対して「その場にいるからこそ感じられること」を強く意識した一か月でした。単なる出来事ではなく、それぞれの体験に意味を見出すことができた点で、非常に密度の高い時間であったと感じています。今後は、この経験を活かしながら、さらに成長していきたいと考えております。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生修了報告書

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026 年 5 月 23 日

2025 年 8 月から 2026 年 5 月までの約 10 か月間、アメリカ・オハイオ州のフィンドレー大学で留学生活を送りました。今振り返ると、この 10 か月間は本当にあっという間でありながら、これまでの人生の中でも特に濃く、充実した時間だったと感じています。留学前は、英語力への不安だけではなく、海外で長期間生活すること自体に大きな緊張を感じていました。これまで 20 年間福井県で育ってきた私にとって、海外で生活することは未知の経験であり、自分が現地の環境に馴染めるのか、授業についていけるのか、不安に思うことも多くありました。しかし実際に留学生活が始まると、不安以上に新しい発見や刺激に溢れており、毎日が学びの連続でした。この留学は、語学力の向上だけではなく、自分自身の価値観や考え方を大きく変える、かけがえのない経験になったと感じています。

留学中は、主にマーケティングに関する授業を履修しました。アメリカで学ぶマーケティングは、私が想像していた以上に「人」に焦点を当てた学問でした。商品の売り方だけではなく、「人はなぜその商品を選ぶのか」「企業はどのように人の感情や価値観を分析しているのか」といった内容を学ぶ機会が多く、とても興味深く感じました。特に印象に残っているのは、SNS マーケティングや広告戦略についての授業です。現代では、企業は単に商品を宣伝するだけではなく、SNS を通して消費者と関係性を築き、ブランドイメージを形成していることを学びました。実際の企業事例を分析する課題も多く、日本とアメリカでの広告表現や消費者へのアプローチの違いを知ることができたのも非常に面白かったです。また、授業ではグループワークやプレゼンテーションが多く、日本との教育スタイルの違いを強く感じました。アメリカでは、学生一人ひとりが積極的に発言し、自分の意見を持つことが重視されていました。最初の頃は、自分の英語に自信がなく、授業中に発言することへ強い抵抗がありました。しかし、現地の学生たちは私の拙い英語にも真剣に耳を傾けてくれ、「完璧な英語」よりも「自分の考えを伝えようとする姿勢」が大切なのだと感じるようになりました。留学前の私は、失敗することを恐れて慎重になりすぎていた部分がありましたが、この経験を通して、まず挑戦してみることの大切さを学ぶことができました。

マーケティング以外にも、心理学や異文化理解に関する授業を受講しました。心理学の授業では、人間関係や感情、行動心理について学びましたが、その内容は授業だけではなく、実際の留学生活の中でも深く関わっているように感じました。異なる文化背景を持つ人々と関わる中で、自分にとって当たり前だった価値観が、人によって全く異なることを何度も実感しました。例えば、日本では相手に配慮して遠回しに表現する場面が多い一方で、アメリカでは自分の意見をはっきり伝えることが重要視されていました。最初はその

違いに戸惑うこともありましたが、次第に「違いを否定するのではなく、理解しようとする」ことが異文化交流において大切なのだとを感じるようになりました。

学業面だけではなく、課外活動や日常生活でも多くの貴重な経験をすることができました。特に印象に残っているのは、大学の合唱団活動です。私は留学前、音楽を通してここまで多くの人と繋がれるとは想像していませんでした。合唱団では、毎週の練習や演奏会を通して多くの学生と交流することができました。授業中とは違い、より自然な形でコミュニケーションを取ることができたため、英語への苦手意識も少しずつ薄れていきました。中でも特に忘れられないのが、合唱団で参加したヨーロッパ遠征です。アメリカで出会った仲間たちと共にヨーロッパ各地を訪れ、歴史ある街並みや文化に触れながら演奏を行った経験は、留学生活の中でも特に大切な思い出です。日本で生まれ育った私が、アメリカの大学に留学し、さらにヨーロッパで現地の人々の前で歌っているという状況を、不思議に感じる瞬間もありました。言語や国籍が違っていても、音楽を通して人と繋がることができるという経験は、自分の価値観を大きく広げてくれました。また、遠征中は長時間一緒に過ごすことも多く、友人たちとの距離もさらに縮まりました。深夜まで将来や文化の違いについて語り合った時間も、今では大切な思い出です。

また、この留学生活の中で最も印象に残っているのは、「人との出会い」です。授業や課外活動、ハウスでの共同生活を通して、本当に多くの人と出会いました。最初は、自分の英語が通じなかったらどうしようという不安ばかりでした。しかし、毎日一緒に食事をしたり、買い物へ行ったり、何気ない会話を重ねていく中で、少しずつ英語を「勉強」としてではなく、「人と繋がるための手段」として考えられるようになりました。現地の友人たちは、私を「日本人留学生」としてではなく、一人の友人として接してくれました。友人の家族が家に招待してくれたり、一緒に旅行へ行ったりした経験は、一生忘れることができないと思います。また、別れの際には涙を流しながら「また会おう」と言ってくれる友人もあり、この10か月間で築いた関係の深さを実感しました。留学前は、「海外の友人を作る」ということをどこか特別なことのように感じていましたが、実際には、文化や言語が違っていても、人と人との関係に必要なのは思いやりや相手を知ろうとする気持ちなのだと感じました。

さらに、留学を通して日本を客観的に見る機会も増えました。アメリカで生活する中で、日本の治安の良さや公共交通機関の正確さ、接客の丁寧さなど、日本の素晴らしさを改めて実感しました。一方で、アメリカでは一人ひとりが自分の意見や個性を大切にしており、その姿勢に刺激を受けることも多くありました。友人たちから日本文化について質問されることも多く、日本の食文化や学校生活について説明する中で、自分自身も改めて日本文化の魅力を再認識することができました。特に福井県について話すと、「自然が豊

かで素敵な場所だね」と興味を持ってくれる友人も多く、自分の故郷を誇らしく感じました。もちろん、留学生活は楽しいことばかりではありませんでした。英語が聞き取れず悔しい思いをしたこと、自分の気持ちをうまく伝えられず落ち込んだこと、家族や日本の友人に会えず寂しく感じたこともありました。しかし、そのたびに周囲の友人や先生方に支えられ、乗り越えることができました。以前の私は、「失敗しないこと」を重視していたように思います。しかし留学を通して、「失敗してもいいから、まず挑戦してみること」が自分を成長させるのだと学びました。

この10か月間で経験したことは、とても一つの報告書では書ききれません。授業での学びだけではなく、人との出会い、文化の違い、新しい環境への挑戦、そのすべてが私を大きく成長させてくれました。留学前の自分と比べると、以前よりも新しいことに挑戦することへの抵抗が少なくなり、自分自身に少し自信を持てるようになったと感じています。

最後になりますが、この貴重な留学の機会を与えてくださった福井県、フィンドレー大学、そして留学前から留学中にかけて支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。この留学で得た経験や出会いを今後の人生に活かし、福井県や社会に還元できるよう、これからも努力を続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu